

十三松堂觀摩錄

301  
100



始



630

十三松室觀摩錄

301  
100



三松堂觀摩錄





平城郡山北



明治二十六年余奈良縣に官せし時郡山城北

九條村なる柳澤炭坑山入郵務駕の書印に常

す家は形勝を占め老松十三株亭とて屋

を覆ふ窓を推せば平城郡社の平藁を隔て春

日高園三歌多武の連峰一眸に横ら書齋

とて十三松堂とよ居ると四年意頗る快

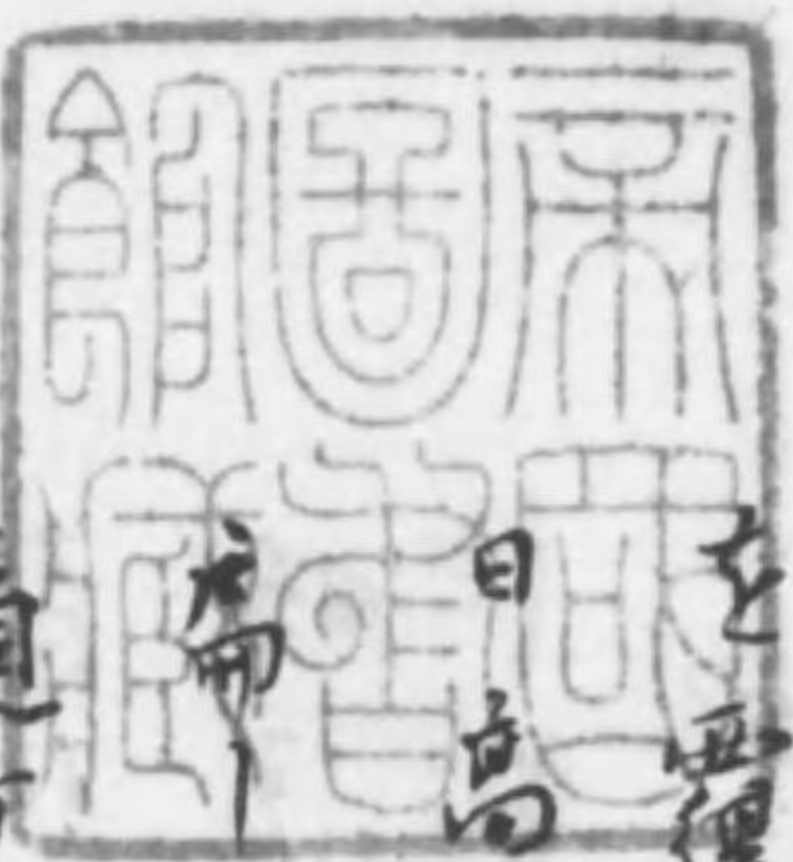
適たり明治三十年東京に移り牛込矢来の輜

廬に居を定めて己に三年餘年窓外一松

たりとつとも因循仍十三松堂と稱す余

平生他の嗜好なき公退獨處の時墨書

筆



堆裏架上新古の書を乱抽して耽讀すべくも  
を臺上の樂とせん佳客まれば書畫を展觀  
し器玩を麻手淨しく品階高量して至客相  
忘れ悠游自適晷日移るとを知らざるなり  
時より茶筵を設けて雅客と請ひ清談を享  
し茗茗を啜り至客交驩夜の更を忘る、  
とあり是れ十三松室裏の日常行事なり  
余宛繫四十年の後今茲宛七十又四にして始  
めて閑、就きく閑、以て性を養ふべく以て心  
を悦ばすべく又以て生を怡しむべし幸、

し七番未だ読せず百亦く整せず目も念明なり  
自今而後益々未だ讀まざる書を讀む多し  
佳客を逢へて款晤せんとと冀ふ頃日遠方  
の函書を正寄せり余の健康如何動履如何と  
問訊を辱しすもの多し一々之に報答すべく  
能くも依て日常觀摩する書畫器玩の若干を  
圖示し又問、之を獲らる談話を挿して十三  
松室觀摩録と題して之を交遊諸子の座右  
に呈して一瞥を乞ふ所以の之、依て老生尚康  
寧日と如何、怡悦清遠せらやの情景を看

30/-100

取了得  
昭和十年九月十五日

山本直彦識

十三松堂觀摩錄目次

書蹟 第一

一	釋善珠墨蹟	十三	鐵舟德濟墨蹟
二	藤原道長書寫 佛說彌勒成佛經	十四	瑞溪周鳳墨蹟
三	慧心僧都墨蹟 一乘要決卷中	十五	一休宗純墨蹟
四	表 嘉保二年具注曆	十六	春浦宗熙墨蹟
五	背 祕密曼陀羅大阿闍梨耶付法傳	十七	傳菴宗器墨蹟
六	明惠上人墨蹟	十八	天隱龍澤墨蹟
七	四分隨機羯磨卷上	十九	了菴桂悟墨蹟
八	貞觀政要卷二	二十	大明提督李如松草書
九	梵琦楚石墨蹟	二十一	獨立性易墨蹟
十	張卽之墨蹟	二十二	大雅堂行書五大字
十一	中峯明本墨蹟	二十三	鳳洲先生詩書
十二	虎關師鍊墨蹟	二十四	古畫 許由巢父
	性海靈見墨蹟	二十五	古畫 文王呂尙

畫蹟 第二

二十六 牧谿 雨景山水  
 二十七 高克恭 山水  
 二十八 顏輝 朱衣達摩  
 二十九 因陀羅 拾得  
 三十 無款 駿骨圖  
 三十一 聚頭扇 沈石田 山水  
 三十二 周文 巖上觀音  
 三十三 雪舟 瓶花圖  
 三十四 秋月 猿猴  
 三十五 無款 杜牧像  
 三十六 雅樂助 山水  
 三十七 程正揆 山水  
 三十八 丁雲鵬 釋迦  
 三十九 常信 潘閻騎驢  
 四十 大雅堂 高士觀瀑  
 四十一 高陽山人 蘭亭集卷  
 四十二 抱一 櫻花雉子  
 四十三 秋暉 葛花孔雀

四十四 菊池容齋 西洋美人

彫刻 第三

四十五 銅造如來像  
 四十六 鑿陀羅小銅佛  
 四十七 新羅銅造菩薩像  
 四十八 銅造菩薩像  
 四十九 木造著色不動明王像  
 五十 木造大黑天  
 五十一 漢雄雞泥象

璽印 第四

五十二 籀文古璽 文曰司寇邦  
 五十三 大和古印 文曰安  
 五十四 文三橋 田黃印 文曰山水癖  
 五十五 金印 文曰永壽康寧  
 五十六 古銅印閣

鏡鑑 第五

五十七 神獸鏡  
 五十八 四神仙人鏡  
 五十九 海獸葡萄狩獵文鏡  
 六十 雙龍文鏡  
 六十一 瑞花鴛鴦八稜鏡

六十九 澄泥硯  
 七十 梅月硯  
 七十一 蘆月硯  
 七十二 趙陶齋 陶硯  
 七十三 杜園 竹硯  
 七十四 古銅硯滴十種

几案 第六

六十二 脇机  
 六十三 文机  
 六十四 溜塗螺甸長机  
 六十五 紅木机  
 六十六 樂浪出土古案復原

書鎮 第八

七十五 銀錯恠獸書鎮  
 七十六 鑲金行龍書鎮  
 七十七 金銀錯鳳凰書鎮  
 七十八 古銅蘭亭書鎮

古硯 第七

六十七 凹心硯  
 六十八 端溪子石耳聽好消息硯

香爐 第九

七十九 青磁算木手香爐  
 八十 古青磁香爐

牧童 爛柯 玄武 蠶山 獅子青  
 獅子黃 水飲獅子 兔 翡翠 鳩

- 八十一 青磁唐冠香爐
- 八十二 白定耳付香爐
- 八十三 黃瀬戸香爐
- 八十四 繪唐津香爐
- 八十五 古銅鹿盧燈香爐

香合 第十

- 八十六 染付香合三種
- 八十七 掘出香合三種
- 八十八 異國物見立香合六種
- 八十九 髹漆香合六種

豐助菊醬寫 松哉蘭香待香桶  
松哉花靈藤實 揚成屈輪

壺 第十一

- 九十 漢銀錯壺
- 九十一 漢金錯小壺
- 九十二 漢窯素燒壺
- 九十三 漢窯狩獵文浮彫壺
- 九十四 綠釉劃花圓甬
- 九十五 南京染付扁壺
- 九十六 李朝染付鳳凰扁壺
- 九十七 李朝燕支牡丹繪壺
- 九十八 李朝燕支雲鶴壺
- 九十九 波斯溫壺
- 百 古瀬戸祖母懷茶壺
- 百一 青磁栗鼠耳花入

花入 第十二

- 百二 青磁浮牡丹花入
- 百三 撫順出土捺貫花入
- 百四 仁清尺八花入
- 百五 古伊萬里錦手花瓶

釜 第十三

- 百六 古蘆屋殿尾垂釜
- 百七 古天明達磨釜
- 百八 道仁責紐釜
- 百九 宗旦時代九兵衛四方釜

水瓶 第十五

- 百十六 陶胡瓶
- 百十七 古銅水瓶
- 百十八 唐窯水瓶
- 百十九 朝鮮石製水瓶

茶入 第十六

- 百二十 金輪寺御茶入
- 百二十一 時代桐紋蒔繪中次
- 百二十二 三笠山棗
- 百二十三 小川手茶入
- 百二十四 黃瀬戸大海茶入
- 百二十五 備前茶入
- 百二十六 薩摩茶入
- 百二十七 仁清口瓢箪茶入
- 百二十八 染付筒茶入

水指 第十四

- 百十 青磁算木手足付水指
- 百十一 青磁花卉浮文様水指
- 百十二 染付竹鶴水指
- 百十三 繪志野口四方水指
- 百十四 撫順出土耳付水指
- 百十五 木白赤膚水指





茶盤 第十七

- 百二十九 白定茶盤
- 百三十 白定茶盤 覆輪
- 百三十一 白磁茶盤
- 百三十二 建盞天目
- 百三十三 高麗玉子手茶盤
- 百三十四 高麗吳器
- 百三十五 三島鹽筒
- 百三十六 三島桃形茶盤
- 百三十七 鬼熊川茶盤
- 百三十八 繪熊川茶盤
- 百三十九 半使茶盤
- 百四十 安南茶盤
- 百四十一 志野底紅茶盤
- 百四十二 丈山手造赤樂茶盤
- 百四十三 西山公手造茶盤
- 百四十四 陳元贊手造茶盤

- 百四十五 五良七染付茶盤
- 百四十六 古萩茶盤
- 百四十七 木米人形手茶盤
- 百四十八 新製天目茶盤三種
- 諏訪蘇山曜變天目
- 板谷波山曜變天目
- 清水六兵衛油滴天目

酒器 第十八

- 百四十九 三島酒次
- 百五十 宋胡祿酒次
- 百五十一 尾戶酒次
- 百五十二 酒坏十二種
- 定窯刻花 青華 金欄手 青井戸
- ロージャン 阿蘭陀 御本紅葉手
- 古唐津：唐津皮鯨 伊賀 大樋
- 永樂

鉢皿 第十九

- 百五十三 高麗青磁鉢
- 百五十四 暹羅ベンチャルン鉢
- 百五十五 波斯盞手鉢
- 百五十六 九谷深鉢
- 百五十七 比良深鉢
- 百五十八 乾山竹之繪四方皿
- 百五十九 乾山百合之繪四方皿
- 百六十 木白赤膚大平鉢

雜載 第二十

- 百六十一 仁和寺摩尼珠文錦袈裟裂
- 百六十二 神護寺蓮葉文錦佛旛裂
- 百六十三 十字架圖麻網刺繡
- 獅子弄球圖麻網刺繡
- 玉冠
- 百六十四 金銀錯嵌石帶鈎
- 百六十五

- 百六十六 南蠻罇
- 百六十七 波斯銀象眼鐵盤
- 百六十八 七寶蛇籠釘隱
- 百六十九 色繪彫刻長圓櫃
- 百七十 鎌倉彫高杯
- 百七十一 存清天目臺
- 百七十二 時代菊水蒔繪小角赤沉宮
- 百七十三 南蠻人蒔繪盆
- 百七十四 膳碗 根來皆朱折敷 根來皆朱四碗
- 根來皆朱 椀子 豆子 椿皿
- 淨法寺碗 早雲寺芹碗 吉野碗
- 喰初碗
- 竹經筒
- 瓦磚 漢狩獵文磚 咸寧元年磚
- 鷗寺首箭文瓦 法隆寺忍冬文瓦
- 新羅普門寺飛天瓦

- 百七十五 文人書畫扇屏風
- 百七十六
- 百七十七

以上

唐高祖武皇帝元元年歲次庚子俊法師滅度後  
 唐太宗文皇帝元元年歲次戊辰合卺年釋善珠  
 唐高宗天皇太子元元年歲次丙申年  
 唐中宗景皇帝元元年歲次甲子年  
 唐睿宗則天皇帝元元年歲次壬午年  
 唐肅宗孝皇帝元元年歲次庚子年  
 唐德宗憲皇帝元元年歲次戊申年  
 唐順宗憲皇帝元元年歲次丙寅年  
 唐憲宗純皇帝元元年歲次甲戌年  
 唐穆宗睿皇帝元元年歲次壬午年  
 唐敬宗睿皇帝元元年歲次庚子年  
 唐文宗憲皇帝元元年歲次戊申年  
 唐宣宗忱皇帝元元年歲次丙寅年  
 唐懿宗僖皇帝元元年歲次甲戌年  
 唐僖宗昭皇帝元元年歲次壬午年  
 唐昭宗晔皇帝元元年歲次庚子年  
 唐哀宗昺皇帝元元年歲次戊申年  
 唐末帝昶皇帝元元年歲次丙寅年

一 釋善珠墨蹟

唐禪智寺故大德法師崇俊塔銘并序

紙本墨書 卷七十九 長二尺一寸二分

末尾に識語あり

唐孝義皇帝上元元年歲次庚子俊法師滅度後

其庚子至延曆七年歲次戊辰合卺年 釋善珠

善珠ハ姓ハ阿刀氏南梁の人或云藤太後の藤子

なりと卍威興福寺に入り去時之後以て法相を習

ふ天性神悟勉學輟め未だ弱冠なりたり

博く三藏を究め唯談に通し尤も因明に精し

君臣欽尚し四衆稱奉せり比叡山根本中堂に落

慶供養の日傳教大師は善珠を請して大導

師とあり延暦十六年四月寂年七十五善珠の遺蹟甚少し唯  
二種のみ傳存す一ハ西念院文書中、奉請經論事といへる  
六行二十三字のものと一ハ秋篠寺舊藏法相先徳行傳とい  
ひし一巻のものとなり此一巻はいつり割裂せられて二片と  
なり一片ハ唯談論後序と惠詔汁師傳の二篇を収め他の  
一片ハ一ノ崇俊塔銘なり前者ハ今法隆寺の法藏、編  
し近年國寶、登錄せられたる曾、書苑：唯談論後序を  
収載す、當り黒木欽堂の評論して曰く西念院文書中の  
遺蹟ハ勝寶五年九月四日付のものなれハ善珠三十一歳の筆  
蹟、係ら而して法相傳を書寫せられたるハ延暦七年の事  
にして寂年より逆算すればその六十五歳の筆、朱はた、  
知るべし此卷の書ハ形瘦セ骨清くして三十餘年前書

せる西念院文書中の書とは殆ど別人のものと見らる、も恐らく  
ハ壯年の善年と別あるものとも別人の手、朱はた、あり  
たるべし而して此書平安朝の權外佐貳等の先河を問け  
るものといふべく、以て和様の古風の因革する所をト  
する、是とんうと

二 藤原道長書寫佛說強勒成佛經

紺紙金泥 長十一尺五寸

末尾、願文あり

願以手自書此經功、

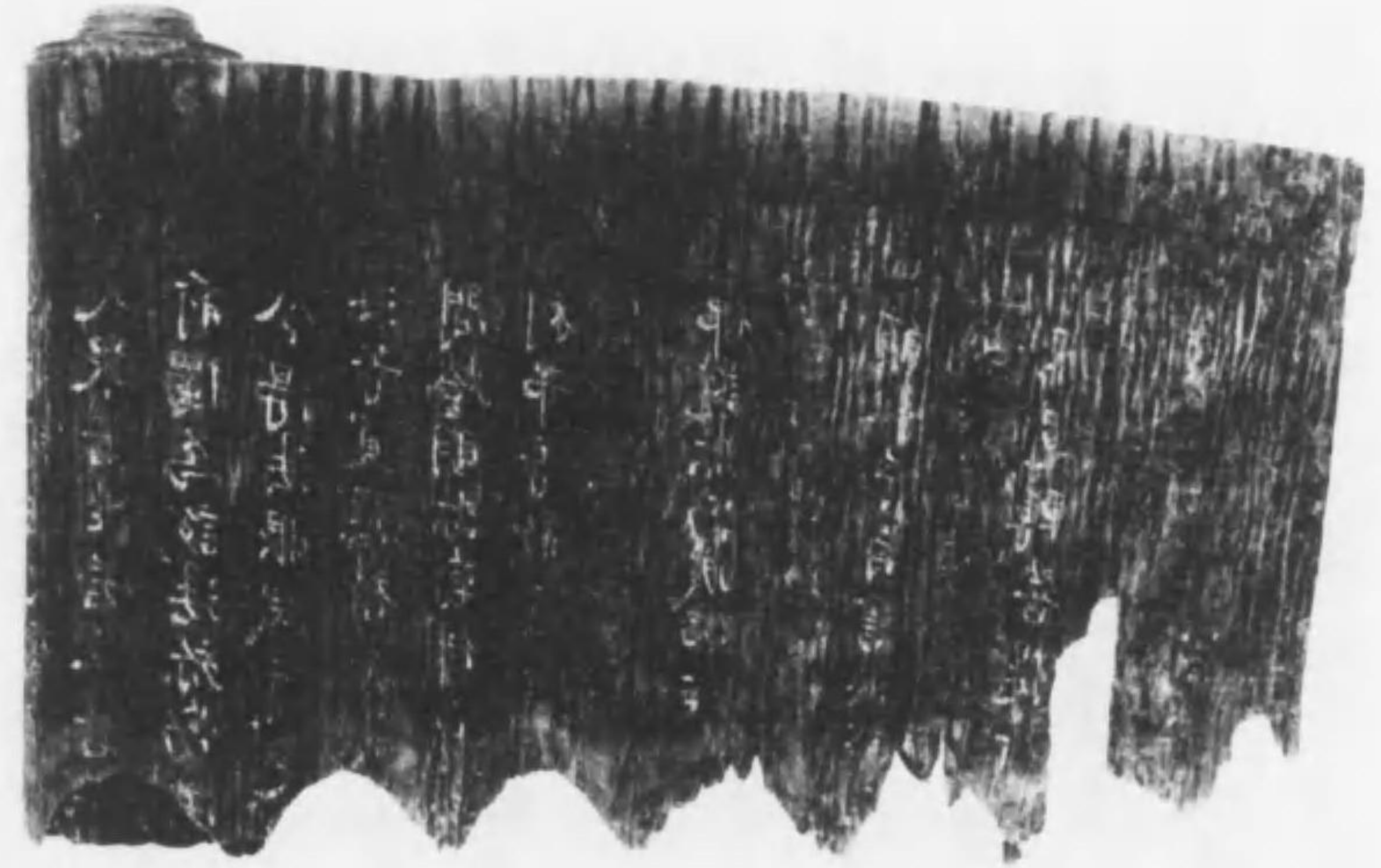
樂淨土隨從、

不退轉菩提行、

寛弘四年、

經卷の下半は全長割裂して無く經筒、水浸ありて經卷の下半糜爛してよりろくして篋内の湿润の爲、表面の金字ハ悉、低背、移写せしむる背面の文字金色却て燦爛たり因て按ずる藤原道長、寛弘四年、金峯山に奉納する經卷の内ものろくして如何と云ふハ經筒の鉄走、云

南瞻部州大日本左大臣正二位藤原朝臣道長百日照齋平信心道俗若干人以寛弘四年秋八月上金峯山以手自奉書妙法蓮華經一部ハ卷五量義經觀音賢經各一卷阿彌陀經一卷強勒上生下生成佛經各一卷般若心經一卷合十五卷由之御篋埋于金峯山



此經卷ハ十五卷の内、一にて強勒成佛經をり而して道長の手自書寫す所ありと推知し得くし道長、經卷書寫の事實ハ御堂問白記寛弘四年秋之の卷に記載あり、刊本陽明世傳此卷の解説云

此卷七月百より起りて十四日まで日記ありし其以後中絶し八月二日に至りて再、日記と見十三日又中絶す二日より

十二日までの記は道長の生涯を通りて最<sup>ニ</sup>記念せらるべき  
事蹟を註せり此向<sup>ニ</sup>於て道長<sup>ノ</sup>ねての宿願を果さん為  
大和の金峯山參拜を思ひ至りて二日旅途<sup>ニ</sup>より名清水ハ  
幡宮<sup>ニ</sup>詣り、其夜内記堂<sup>ニ</sup>宿し三日之和<sup>ニ</sup>入りて大安古  
一夜を明か<sup>リ</sup>次て輕寺壺坂寺と旅寤の夢を重ね  
つ、十日金峰山<sup>ニ</sup>辿りつきて金照房<sup>ニ</sup>著し十一日藏王權現の  
御在所の寶前<sup>ニ</sup>祈念<sup>し</sup>て前年書寫せり金泥法華  
經一部及此度新寫せり強<sup>ク</sup>勸<sup>テ</sup>三卷阿<sup>ノ</sup>陀<sup>ノ</sup>經<sup>ヲ</sup>般若心經<sup>ト</sup>  
と<sup>シ</sup>取りて之と奉<sup>テ</sup>獻<sup>ス</sup>し式畢<sup>リ</sup>て後金銅灯籠一具を建て  
書寫經を銅篋<sup>ニ</sup>納<sup>メ</sup>、ゆめて其下<sup>ニ</sup>埋<sup>メ</sup>、以て祈願成就<sup>ノ</sup>契  
縁<sup>ト</sup>せり其行程及行事詳細註記せり此本記中道長<sup>ノ</sup>  
最<sup>ニ</sup>心を籠<sup>メ</sup>り一政<sup>ヲ</sup>せりと窺<sup>ハ</sup>し是<sup>レ</sup>より思<sup>ハ</sup>れ、道長の宿

願<sup>ト</sup>は獨<sup>ニ</sup>、後生菩提の爲<sup>ニ</sup>のこ<sup>ト</sup>ありす其脚幣を捧<sup>ケ</sup>りて小  
守<sup>ノ</sup>御前<sup>ニ</sup>、其名<sup>ヲ</sup>、因<sup>リ</sup>てつ<sup>テ</sup>継子を申し受<sup>ケ</sup>り例<sup>ニ</sup>より此<sup>ノ</sup>道  
長<sup>ノ</sup>い<sup>ハ</sup>ま<sup>ニ</sup>密<sup>ニ</sup>、中宮彰子の皇子降誕を祈念<sup>せ</sup>り、ち<sup>ニ</sup>  
さ<sup>ニ</sup>つ<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>行<sup>ノ</sup>榮<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>物語<sup>ニ</sup>、即<sup>チ</sup>嶽<sup>ノ</sup>精<sup>ノ</sup>進<sup>ノ</sup>の名<sup>ヲ</sup>以て知<sup>ル</sup>此<sup>ノ</sup>大鏡  
、據<sup>ル</sup>此<sup>ノ</sup>常<sup>ニ</sup>、道長の爲<sup>ニ</sup>、其脚<sup>ヲ</sup>せり帥<sup>ノ</sup>敷<sup>ノ</sup>伊<sup>ノ</sup>南<sup>ノ</sup>、途中<sup>ニ</sup>、要  
して報復を圖<sup>ル</sup>との夙<sup>ノ</sup>願<sup>ト</sup>もあ<sup>リ</sup>し<sup>ト</sup>何事<sup>ト</sup>も各<sup>々</sup>と<sup>シ</sup>己<sup>ト</sup>  
う<sup>リ</sup>し<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>金銅灯籠<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>後如何<sup>ナ</sup>り<sup>ト</sup>を<sup>シ</sup>知<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>き<sup>ニ</sup>方<sup>ナ</sup>り<sup>ト</sup>な  
り<sup>ト</sup>此<sup>ノ</sup>經<sup>ノ</sup>篋<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>い<sup>ハ</sup>葦<sup>ノ</sup>拵<sup>ヲ</sup>せ<sup>り</sup>て<sup>ん</sup>、現存す其<sup>ノ</sup>銘<sup>記</sup>、此<sup>ノ</sup>札  
は<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>た<sup>テ</sup>敷<sup>ハ</sup>、前<sup>ニ</sup>、奉<sup>ケ</sup>り<sup>テ</sup>外<sup>ニ</sup>尚<sup>ニ</sup>无<sup>ク</sup>量<sup>ノ</sup>義<sup>ノ</sup>經<sup>ノ</sup>觀<sup>ノ</sup>普<sup>ノ</sup>賢<sup>ノ</sup>經<sup>ノ</sup>各<sup>一</sup>  
卷<sup>ト</sup>あり日次記<sup>ハ</sup>、畧<sup>ニ</sup>、從<sup>テ</sup>、了<sup>ル</sup>、り<sup>ト</sup>ん

國寶<sup>ノ</sup>金峯山寺藏金銅經筒<sup>ハ</sup>、甘<sup>ク</sup>屬<sup>ス</sup>、一<sup>ノ</sup>、了<sup>ル</sup>、經<sup>ノ</sup>切<sup>ハ</sup>、僅<sup>ニ</sup>、二  
張<sup>ト</sup>、一<sup>ノ</sup>、て<sup>ハ</sup>全<sup>ク</sup>を<sup>シ</sup>著<sup>ス</sup>、一<sup>ノ</sup>、褪<sup>レ</sup>却<sup>リ</sup>せり一<sup>ノ</sup>、張<sup>ニ</sup>、二十五行<sup>ト</sup>、毛<sup>ノ</sup>量<sup>ノ</sup>義<sup>ノ</sup>經<sup>ノ</sup>の

残録あり

三 慧心僧都墨蹟 一乗要決巻中

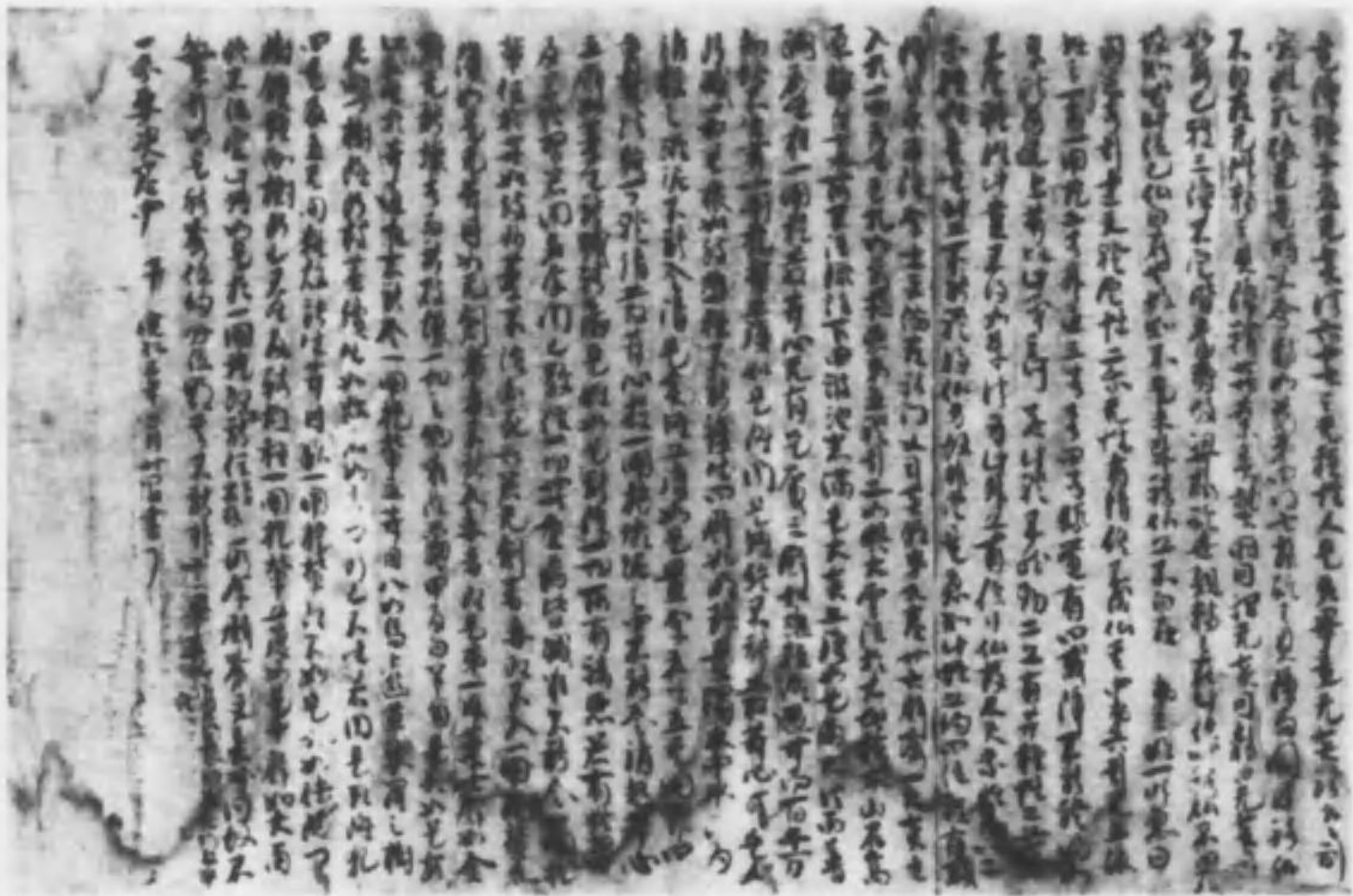
紙本墨書

墨九寸一分

長三十九又七寸五分

卷末、寛仁元年正月廿四日書了とあり

曾、書苑に此巻を収録し、その時黒木欽堂の評記、云  
草書一乗要決一卷巻末跋尾、寛仁元年正月廿四日書  
了の十二字あり、按ずると一乗要決ハ平安朝末期の名僧慧  
心僧都源信の著す所の一たり而して僧都の寂せられし  
は寛仁元年六月にして法暦七十六とありと聞け、此巻を  
書きしはこれにして、其寂前五月の事にして名僧の心血



と心畫とを併せ見ると、得  
るは此書の賜なり、特、其書  
は清秀なる獨草を以て終始  
されしハ洵、書を悦ぶもの、  
合十瞻仰す、其所とす、吾の此  
巻を敬するハ何ぞ、書、草書  
に巻を觀るを稀ならん、吾の  
いなりんやと  
此巻は天平古宮匠諸經  
要集を翻して書し、  
ものなり

四 表 嘉保二年具注曆  
背 秘密曼陀羅七所圖梨耶付注傳

紙本墨書烏絲欄 四五九寸二分 長十九尺七寸

付法傳ハ具注曆を載して書寫ししものなり曆ハ四月二十一日より十月二十四日、至る前後に缺けて存せし断片を此に推歩、依て嘉保二年曆なること知り得現存具注曆中の古きもの一たるべし

東寺所傳ト真言七祖像中ハ弘法大師の書せしりる各祖師の行狀傳を集成ししものなり真言付注傳トし之ハ第八祖弘法大師行狀を追加ししものと大師撰述の廣行注傳ト對し之を畧付注傳トし此卷ハ大治二年三月十日申時許教行房書寫曼陀羅の淺語ありて

記年寫本中最古のものなりし

殊摩陀婆行卷之二  
文字及志批  
根辨黑白日果  
龍慈母懷唯持畫  
夜三ノ一  
相住自俗淨及又許  
自今主王後上一套  
一塵無不法力何類  
何法至有離神息

五 明惠上人墨蹟

紙本墨書 一五二四寸五分 中二五寸七分

一 凡 菩提自執金剛

中理 白茶地十字雲金剛

上下 付地上代紙

秋澤拾遺漸知二之文字、夜窓批、燈、根辨黑白之因果、雖、龍、慈母之懷、唯、持、畫、夜、三、返、之、權、意、雖、隔、祖師之質、深、信、唯、淺、四、分、之、相、性、自、俗、歸、及、真、諦、自、

今生至<sup>ニ</sup>後生<sup>ニ</sup>一照<sup>ス</sup>一塵<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>注<sup>ガ</sup>何<sup>ヲ</sup>願<sup>ヒ</sup>何<sup>ヲ</sup>望<sup>ム</sup>有<sup>レ</sup>龍<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>息<sup>ヲ</sup>乎  
明<sup>意</sup>上人の述作春日大明神講式中の文句駢儷四六誦  
の妙文なり本書上人の名を——とソとも高山寺所傳  
上人真蹟に比校——て是ら上人の真蹟なることを知るべし

六 四分隨機羯磨卷上

付紙金銀隔行行十八字 護金軸 倚帶  
見返金泥繪釋迦説法圖 表紙金銀泥水草圖  
中尊寺好の中たるは大字多註ありとのりて希有本の  
些の損傷をく綺帶も本のまゝにて完好なり

七 貞觀政要卷二

紙本墨書 堅九寸七分 長四寸六分一寸  
卷子本二十七紙 紙二十行 行十四字 烏絲欄  
皇御金澤文庫の墨印を數所、押しつ  
金澤文庫本の一より徳富氏成篁堂文庫に之と同種の別  
巻一本を藏儲せり

八 梵琦梵石墨蹟

紙本墨書 堅九寸 巾一丈九寸五分  
中札帶紗金 上下紐 塗軸



日本橋庭壽藏主  
 明憐遺物中不著一  
 道人我直取之上善  
 提者它日孤峯頂上  
 盤結草庵佛祖也  
 祖在在非浪許也  
 但余主未本文字特  
 道聚半載感其高韻  
 不可區々降御里可  
 為難同佩之卷  
 高韻之祖之也外母  
 去飛  
 年三月廿二日  
 道人

日本橋庭壽藏主、高明寧遠、胸中不  
 一著一毫、人我直取、上善提者、它日  
 孤峯頂上、盤結草庵、詞佛祖也、  
 在浪浪許也、常託余主、嘉禾天寧時、  
 道聚半載、感其高韻、不可忘、今第  
 故里、毫不可為、賸因用了、庵和尚高韻、  
 以祖之、且作耳會、張本云、至正廿三年  
 三月廿二日、楚石道人

印二

此墨蹟ハ、琦楚石之、椿庭海壽の東  
 帰を送る詩の跋文なり、因て、  
 原本ハ、又盲なる茶人の為、割裂

之を、後半は、記年より、右印も具、寸法も恰好なるハ  
 之を、裱装して、傳へるものなり、前半ハ、所在詳ならず  
 全帛に憾とせ、大正庚申の歲、根津青山一日、余を請  
 して、其所藏墨蹟、數十軸を、開せしむ中、楚石の送  
 詩墨蹟あり、跋文も具、在り、熟視する、廓填本の疑  
 あり、蓋し原本未、割裂の厄に遭はざる前、模する所存  
 人多し、此模本あり、為人全豹を窺ふこと得、何の  
 幸、之、若くも、因て茲、其詩を、録存す

日出西方、夜落東、正當臘月、飄春風、如今世、詭向誰攀、十  
 箇五、双皆夢中、只恐冤家、不相過、遇着何須、重解、  
 三千里外、摘楊花、却咲、痴兒拈柳、紫犢頭、太窄、舌頭、乳、  
 山臨濟、俱顛預、椿庭藏主、但一默、五千條、老、誠、無端、曲、录

木床參了大老、未終口時先被掃去、掃去處更須訶了、訶了時多可了、技業園裏、舊禪榻、蒼苔滿地、無之踏、倚牆高唱、歸去來、古鏡重磨、若光透、匣寒山之狂、捨得、顛須、臨山頂、撐鐵瓶、諸方說禪、往々地、何以飯飽、橫刀、眠山僧、蘸筆、脚相送、莫把封皮、作信傳、

九張印之墨蹟

紙本墨書 墨九寸九分 横一尺九寸七分  
 一五字爪帶 淺葱地金剛  
 中廻 葦地花鬼一主個 上下葦地紙 牙軸  
 文曰

在親 民在 止於 至善

在親民在止於至善  
 朱欵印 真珠宗覽外題  
 礼記大學子篇を寫せる長卷の  
 殘缺なり朱畫章句より親民  
 を新民、作化とも張即之の朱  
 畫と同時代の人なると其説、從  
 へりしなり  
 徑山三準禪師其最愛の弟子  
 辨圓因字即聖一國師の東歸  
 除一譏別として張即之の  
 墨蹟と牧齋法常の墨畫の  
 若干を指すへ帰るゝめりる也

のらうく見ゆそは牧齋は園尔と同参の弟子にして  
即之は方外の友たるゆゑなり東福寺にハ人々尚即之  
の墨蹟を若干傳存せり陶宗儀の書史會要  
張即之字温文號樗寮晉陽人參政孝伯之子官至  
直秘閣致仕以能書聞天下特善大字為世所重といり  
其書法就りてハ姜宸英の湛園題跋書法歐陽率  
更加之險峭遂成一派といひ陳眉公の妮古錄據ハ  
ハ即之ハ伯父張于湖先生書を學ひいり于湖先  
生ハ顏魯公を師とす即之は精刻急變し  
て遂ハ一家を成すとすり歐陽より出てくるといひ顏  
より出てくるといハ疵ハ是なるを知らざ化險峭と  
いふ刻急といふ即之一流の書体を形容し得て妙なり

好古堂書畫記、即之、陶詩種豆、南山下の一首を書し  
ゝるを見り、金錯刀之法を用ひつと記せり、即之の書は  
鋒銳呈露、劍氣橫秋、ともしく、筆勢ナル、水精の書  
をうり、能く火を種ふの如驗ありとて、藏書家多と即之  
の書を珍重するなり、湛園題跋、是をり、元の大字宰相  
完顏、々重價を多けて即之の書を購ひつとつと、いハ我邦、  
傳來、いりとの、額装とて、楮間、掲ぐるもの多く、是ハ  
止所の傳説、依り、いり、渡の三筆、と稱く、いり、三藏院  
を、松花堂の内、三藏院と、先悦とは、張即之、私洲するに  
ありといひ、いり

今年咬不斷便得取未  
 身咬不斷但得取未  
 不覺種善則出苦界  
 甚三十年幸多時到極則  
 便得取未十年在極地  
 斷時節但由極地  
 咬斷不信心不變不亦更  
 有甚善處不不難在天可  
 自是極地也(是古不覺  
 不覺未法內可方上言  
 斷身信是極地相則極有  
 不覺心善解而存此善  
 證是為善其正悟明也  
 却亦亦於此是極地也本

十 中峰明本筆蹟

紙本墨書 四行  
 一 亂鈔金 中前地銀子  
 上下他  
 玉舟宗瑞極

今年咬不斷便得取未年咬  
 愈咬不斷但得取未退轉  
 間斷咬去更說三十年五  
 年咬到極則處當取有前年  
 地折暴地斷底時節但堅極  
 此要咬斷底信心不變不易更有  
 甚磨不了辨底大事自是極地  
 通之正志不堅不密未嘗向所

參話上多得脚字。偶見人法相似般若。又乃將心學解尚  
 存此輩認見。若要真正悟明。是謂却步求前。是理也  
 明本

書法の古拙なるもの中峯和尚の柳葉体、若くものな  
 し而も之を留り尚す。所以に早く元筆致其物、ちとす  
 して筆をその徳光の如くしむる所あり

十一 虎關師鍊墨蹟

紙本墨書 四行  
 堅ニラナク 横立寸七分

秋聲樓頭半夜翻

下  
 一  
 虎

虎關嘗謂くらく今時此方の庸流奔波して宋、今是、  
 國の耻を遺すを吾、支那、無して國、人多を知らし  
 くと自家語し海、無せんとせり、母、阻止せり化て南  
 遊の志を遂けりし、寧ろ山の未化、逢れ相見して  
 互に黙許し又一山の言、感涙して遂に元亨釋書三  
 十卷を大成す所謂五山文学の一山虎関、依て創始  
 せり、了りたり、虎関の書を善とし詩、工なり草  
 書、黄山谷を師と、龍蛇奔騰の勢あり、此軸の具片  
 鱗を窺ふべし

妙筆佳話

十二性海靈見墨蹟

紙本墨書

堅三片寸五分

横四分八分

一札 紫地印金

中堂他銀閣

上下挂

俗子多退道心、所以魔行、遮護千怪、所託萬論、所陳若不去  
 淫、斷一切清淨種、若不去酒、斷一切智慧種、若不去盜、斷一切  
 福德種、若不去肉、斷一切慈悲種、三世諸佛、同口敷宣、天下  
 禪宗一音、演暢如何、後學累不曉、徒自毀正因、反行魔說、只  
 為宿業、業種生、遇邪師、善力易消、惡根難拔、豈不見古  
 聖道、見一魔事、如萬箭、橫心、聞一魔聲、如千錘、剗耳、連連  
 離石、可見聞、各自究心、慎莫容易。

右永明智覺寺禪師之墨蹟

明徳年中孟秋上澣、示南禪退耕小比丘靈見九科書于明月樓下

退耕史始、虎關和尚の道風を慕い之、隨ひて日夜昏參、  
 應永二年南遊して月江即休了、歷参して優賞せられたる  
 自、謂へらく吾師虎關和尚、給ゆるものなりと遂に  
 受法せしめて帰棹す是より先貞和二年虎關寂す預一  
 伽黎を以て弟子龍泉令淬、遺命して曰く靈見首座風、  
 佛祖の淵源、徹し後未言内の棟梁と成り去らん、嗚呼  
 とい海雲萬里信誼を絶す宜しく帰棹、着岸の日を以て  
 此伽黎を授けよと、泉性海の帰朝を聞き之を泉南に迎へ  
 遺命を述べて之を舟す性海虎關、嗣法す師弟聖摩お通  
 すと奇特と評之し性海深く足利氣満、帰依を受け東福  
 天龍南禪に據り道風大、颺り宗門の棟梁なり

一 聲玉笛起高樓、  
 猿籟梅華滿地休、  
 誰到壽陽宮裏事、  
 冷煙疎雨不勝愁、

十三 鐵舟德濟墨蹟

紙本墨書 墨二尺寸三分 横寸二分

一 凡白華地獄金 中迦華地獄所 上下種地結

一聲玉笛起高樓、猿籟梅華滿地休、誰到壽陽宮裏事、  
 冷煙疎雨不勝愁、 印一

鐵舟南遊元、ありし時順宗皇帝共道僧を崇む特、國  
 通大師の跡を賜ふ師天性章書、妙なり曼字片箋、と之

を得るとの實を措くこと云

十四 瑞溪内鳳墨蹟

紙本墨書

卷三十五寸五分

横一尺一寸四分

松鷗齋記

鷗有松則聞之、鷗有松則去之、聞也、然則鷗不可有松乎、曰否、鷗水禽也、鷗之水禽也、鷗已有松、鷗何不然哉、松在山林、鷗在江海、地之相去也遠矣、故鷗有松者希而已、誠齋楊萬里詠松上鷗詞曰、偶聞松梢棲鹿、知是此鷗來宿、由是則鷗有松也、嗟矣、予法姪萬年、綿谷、德藏主、以松鷗名齋、有以哉、予論之曰、已補誠齋詞、又慕其人年、支誠齋松、一代不數人之才德、

得寵過於四朝、其官三品、其爵通侯、可謂榮矣、歸休之日、年登八秩、佚老自樂、其機已息、其心已虛、可知也、松上鷗與之相狎、蓋具眼也、一代才德之美、美則美矣、四朝官爵之榮、榮則榮矣、鷗何與焉、惟晚年退休、息機虛心、此即鷗之所以不約而來也、然則子今扁松鷗、名在今日、而實在前者年乎、子自弱齡從予而學、人予已壯矣、予所知子已知之、予所為子已為之、其志勤矣、蠅附驥尾則馳千里、燕附鶯尾則者弱萬里、使子出於名家高門、則青雲入手、如拾地芥、如插頰鬚、之不難也、使子於數間破屋之下、其不為世所錄、宜哉、子於在泥塗、予罪也、無達成晚成皆天也、置而弗議焉、但當尋師問道、孜孜不倦、自今而後、為予所不能知、為予所不能為、則必有誠齋才德、而有誠齋榮遇、庶慰予門窳窳乎勉哉、功成名

遂則歸休佚老、又与誠齋同樂、於是松上鷗可玩而狎也、予所謂名在入日<sup>而</sup>實存暮年者、豈不益乎、**鷗**、予老矣、當與鷗為伍耳、子歸休未為晚也。

釋僧周鳳書時永享乙卯也 卯一 **瑞** 白字

瑞溪和尚は吾桑梓の地泉州堺の産なり相國寺の志求由伸、依りて受戒し天龍鹿苑、禪を修し東大興福、教を學ひ後將軍義政、請せし鹿苑、任して僧録司となりて宗政を掌り又外交の衝、當たり是著す所善隣國之寶記の中、應永九年足利義滿の造明表、日本國王臣某と署す所の不可を齋論して大義名分を正せり是淺見の高邁時流に卓絶せりと評之し松鷗齋記の室所時代、於ける韓柳歐蘇を規仿せる古文の作例と見入るべし

# 漁父生涯竹一竿

十五 一休宗純墨蹟

紙本墨書 四三二六字上下 横七寸  
一冊朝鮮紙 中朝鮮紙 上下黄絹 横七寸  
春澤宗是極

漁父生涯竹一竿

卯一 **一休**



一六 春浦宗器墨蹟

紙本墨書 豎三尺七寸五分 横五寸

一文字紫地印金 中札帶納戸地雲鶴熊子

上下黃絹 牙切軸

真珠菴宗去極

金森字和箱書付

無風着葉動決定有魚行

午二 畫中春浦 宗器

無風着葉動決定有魚行

一七 傳菴宗器墨蹟

紙本墨書 豎三尺二寸一分 横七寸三分

中札帶茶地金襴 上下木紐

溪間豈能留得止直歸大海成波濤

傳菴書 午一

溪間豈能留得止直歸大海成波濤

十八 天隱龍澤墨蹟

紙本墨書 豎一尺六寸 横九寸九分

一札上代鈔 中七筆熊子 上下黃絹

百歲人生斜照殘，對老堪慰鬢霜寒。春天風雨手翻覆，  
此夜無君秉燭看。

晚興在老詩 默雲天隱叟

禪師の錦塔殿の編者として五山詩僧中著名の人名

百歲人生斜照殘 對老堪慰鬢霜寒  
此夜無君秉燭看 此夜無君秉燭看  
中夜無君秉燭看 此夜無君秉燭看  
此夜無君秉燭看 此夜無君秉燭看

十九 了庵桂悟墨蹟

紙本墨書 縦二尺八寸五分 横九寸三分

一文堂堂地印全 中風帶蕉芭地印子

上下草地位佳 牙軸

但盡凡情別無聖解。

大明阿育王山廣利禪寺百二代住持了庵九十歲書

印二 壺中朱文 了庵 方印朱文 推雲軒

但盡凡情別無聖解

大明阿育王山廣利禪寺百二代住持了庵九十歲書

了庵桂悟ハ室町時代京都祥林の傑僧なり永正九年八  
十八歳の時幕府の請を納れて遣明正使として副使以  
下六百人を率ゐて入明しつ時寧波の海港に於て明宦の  
接遇先規に申すも冷遇の態度あり了庵憤然として自  
抗疏を草して直に皇帝に詠ふ武宗皇帝は其支辭の雄  
健にして論難正當なるを以て直に命して待遇先規に申  
しめ且了庵の尚徳共高し道僧を重きとて勅を下  
し了庵を請して阿育王山廣利禪寺住持の席を董す  
めつるといひ世是蹟に於て禪師自ら記する所依りて知ん  
きなり翌年印變を解きて帰朝すや尊祐増儒大官  
別を惜し詩文を以て其行を送るもの多し至陽明も其  
中に入り又以て文遊の汎きを思ふべし帰朝後勅命を以

て南禪寺、まゝつゝし永正十一年九月十五日壬辰年九十  
なり世是蹟に實に没年の作なり  
了庵の畫は雪舟と友と善し雪舟帰禪して久しく豊後  
前防の間、友浪せり了庵南遊の途次雪舟を訪ひ天淵圖  
畫樓記を作して之を與へ又雪舟の畫山水に題賛を著  
けりもの今、傳るもの少かりすを以て文契の密をうし  
よとせし

二十 大明提督李如松草書

紙本墨書 縦四十二センチ 横一八センチ

白水端時雙路鳥下、綠槐高處一蟬吟、酒醒門外

三竿日、卧看暮南十畝陰。

午二 大明提督 李如松印

必以海内為家  
此心之海  
海之無疆  
此心之無疆

文祿征韓役當時の大明提督李如松の在詩を書いた  
るものなり。高齋詩話、云杜詩、雨窗黃鸝鳴翠柳、  
一行白鷺上青天。窗含西嶺千秋雪、門泊東吳萬里船。  
あり蘇東坡の范氏の溪堂、題する詩蓋先杜の詩意を

同じところとて、李如松の進士出身の武人なり其世系  
左の如し



谷日水  
 讀由谷來寄侯中外人  
 驚觀面望塵中并祝  
 由來款：交于情、  
 兄弟新斯一日之親  
 願託千機之報各推  
 金石用協音徽記之  
 精冊影不朽  
 海嶽何期會斯辰  
 緣隨風幸感同仁  
 千秋道在當吾荷  
 一日之親及我新  
 糜味自嘗殊慰甚  
 冰心得澈迴無塵  
 窈々二異國安頭白  
 朝夕相依懷有鄰

二十一 獨立性易學蹟

依本學書  
 四三九寸四分  
 横二尺六寸五分

客自承顏 向若來札  
 探世外人驚識面 望塵爭拜觀西來  
 欽ニ支干 怡ニ兄弟  
 荷斯一日之親 願託千機之雅  
 各推金石 用協音徽  
 紀之楷冊 以彰不朽  
 海嶽何期會斯辰 緣隨風幸感同仁  
 千秋道在當吾荷 一日之親及我新  
 糜味自嘗殊慰甚 冰心得澈迴無塵  
 窈々二異國安頭白 朝夕相依懷有鄰

性易 印二

此學蹟ハ獨立ノ海峽朱之瑜の來化之際一相見一ハ當時の  
 贈詩ヲ序ハ四六駢儷体ニシテ隸書ヲ以テ之ヲ運シ詩  
 ハ草書ニシテ獨立書中の佳蹟ナリ因ニ獨立ニ就  
 一サ一ト記述一ハくへし獨立の前身載曼公ハ福州の儒生  
 ナリ國難遭ヒ永應二年五十歳ニシテ我國ニ投歸す後  
 隱元の會下ニ参リテ受具剃髮一獨立性易ト稱す曼公  
 ハ王寵の言法を傳ふ王寵字ハ後古雅宜山人ト稱す書  
 法ハ晋唐ハ出入し詩ハ清新絶俗トシテ祝枝山之徵明唐  
 伯虎ト名を齊スル曼公言法ヲ深見玄感ト傳へ玄  
 岱山之其子願齋ト傳へ願齋之ヲ東江源鱗ト傳へ明  
 の書法遂ハ海内ニ流行セリ曼公又文三橋のウイ刺

法を傳へてより我邦の佛法觀を改めし

二十二 大雅堂行書五文字

紙本墨書 四三〇八分 横一八分七分

安禪制毒龍

三岳

安禪制毒龍

三岳

御覽

玉皇書

全十年の時吾家の菩提寺正法寺静室和尚の方丈より狩らるるしものなり

蜀に清風動玉座翁妙意の空を各  
星技苑人如蟻は方何牛進以代  
天下乙類有聲を  
明治十年三月十一日  
大正二年三月十一日

二十三 鳳洲先生詩書

明治十年三月十一日 明治天皇御火山御陵御拜の後  
車駕和河泉橋の地所也有る二月十三日、泉州堤  
たす熊野宮、臨所と、とて和河泉三州より遷後也

られて集まらうし学童の肄業を天覧あらせらるる時  
 幸い河泉学校に在学中なりしを選り上げて上げ、但入れ  
 天顔、咫尺して讀書するの光榮を蒙り賞賜を拜し  
 らるるとして深く幼年の心白、終生留まらるる感懐を  
 有り先師鳳洲先生の「當時堺の学事」を著すに  
 以て這般の事細々と先生の發奮せらるる所を  
 先生の古詩一篇「于茲版と録」に記す

二十四 古畫 許由巢父  
 二十五 古畫 文王呂尚

紙本着色

聖二五二五二五 横子



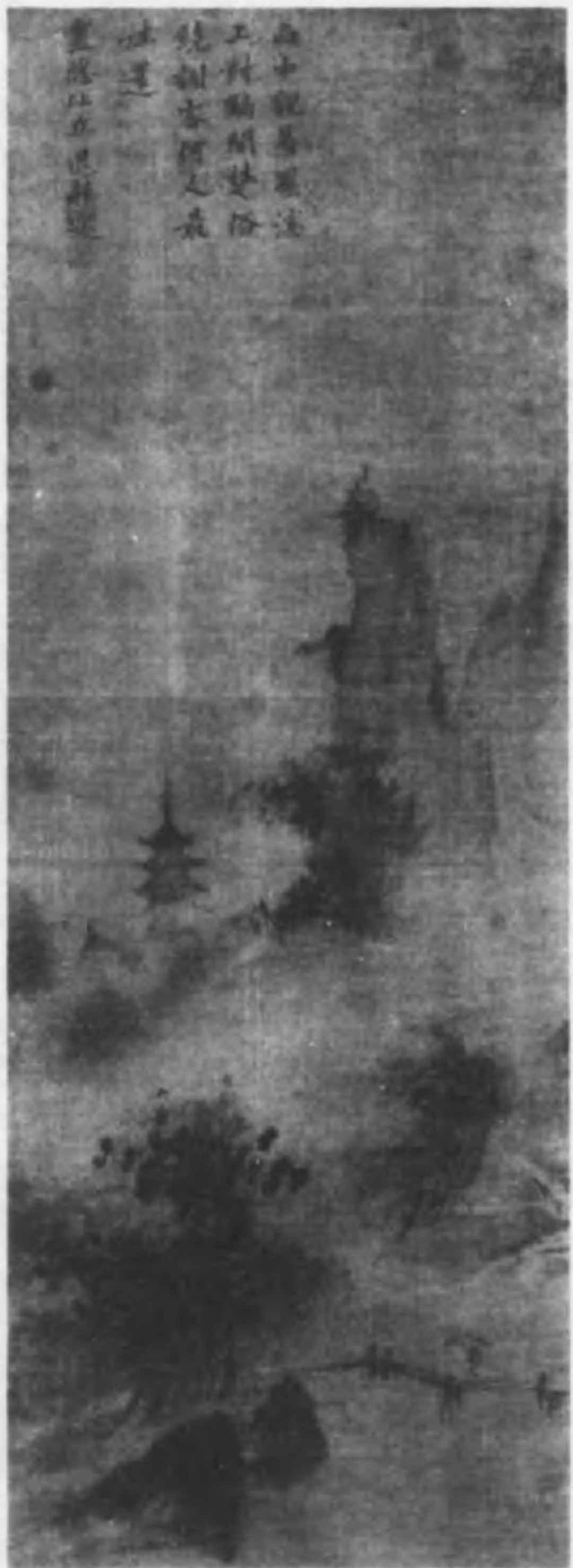
高麗紙のゆき、紙に全体、胡松地をきり、上は支那上  
 代の故事を描き、珍希なる古畫の掲本三枚、南  
 都の古刹より出て、とて明治四十四年、彼地の人推す

しつるを見て繪事<sup>後</sup>の事例を知り得しるや喜ん  
 ころとあり其の中の一因ハ大舜躬耕圖ニシテ東京美術学  
 校文庫ニ入り他の二因ハ即是なり此畫製作の時所を  
 知ると難し類例の比擬すきこものなきを為たり地毛を  
 描くに筆を以てせしめて木版の霰目を押して表顯  
 する手法ハむ奇なり

二十六 牧竊 雨景山水

絹本淡彩 縦三尺二寸 横一尺三寸五分  
 印一 方印朱字 牧竊  
 狩野安信外題 古筆了仲添間

一 汎菴地中全 由迦崩黃地全圖  
 上下莖地絶 牙切軸



雨中觀易罷、淫上對鷗閑、楚俗饒詞客、何人最往還。  
 靈隱比丘 退耕史

退耕德寧ハ牧竊法常と徑山無準會下の同參なり  
 牧竊西湖遊心湖畔の靈隱蘭若を寫し徑持退



耕史之題一なるにあらざるに牧齋の筆也。兩奇を寫  
を、妙くして退耕の詩も之を流の臭氣を脱し、晴日東  
融會の妙を極むる、あらざるを友、白石中野大正の初此  
幅を山科毘沙門堂より獲て大書に題贊の對馬間の句  
ハ山谷の白鷗閑似我より出ると思ふ自、閑鷗又白鷗  
と辨す、至る今は中野遺愛とて余の愛護する所  
なり

二十七 高克恭山水

絹本墨畫 縦一尺三寸五分 横一尺四寸三分  
一凡金地二重、畫中牡丹、草地、金網

中野 白苔地、金入、蝦子  
上下 名物、裂、高砂、蝦子

題贊

青山如舊、淡日暮、不知還、何日、巖危、磴、相尋、一遠看。

岡中事、臨、趙士遵、筆、意 高克恭

渺ニ江波、濶、悠ニ江路、長、漁家、知、不、遠、と、在、水、雲、鄉。

臨川 危素

山岫、開、咫尺、大隄、絶、風塵、豈、是、陶弘景、居然、鄭子真。

鄭文通

高克恭、自贊、中云、予所、趙士遵、ハ宋高宗時代の宋室、漢  
王士遵の事を、予、士遵、人物、山水、を、善、と、す、といふ  
雪舟、ハ馬夏の院、体、畫、と、高克恭、風の南、畫、と、玉淵、本、在、の



破墨法とを撮取して大成しつゝと傳へたる然るに君臺觀  
 左右帳記より高然暉ありて高克茶をく支那畫傳には  
 高然暉の名見當らず我邦に傳存せる高然暉の畫と云ふ  
 ものハ多歎りしもの、こをり此軸ハ高克茶の自畫賛を  
 點詢し希觀の珍蹟として雪舟の出自とを現ししもの  
 なり

二十八 顏輝朱衣達摩

絹本着色 堅ニ八寸三分 横一尺二寸四分  
 一文字茶地妙全 中凡帯丹地七宝繫銀入儒珍  
 上下肩黄地緞子 牙捺軸

狩野安信外題

古筆了意札

風激寒松、雲橫少室、一默九年、銀山鐵壁、可冷  
梁魏、年六識。

建仁 覺圓贊



宋朝祥興二年我弘安二年鏡堂覺圓、無學祖元と共に  
来化す時、年三十九西暦二年建仁を領す此贊其時以後

、於て作す所なり

二十九 因陀羅拾得

紙本墨畫

縦二六九寸

横一六三寸

一爪並地印金

中少彦所

上下室蓋有職裂

乍一

三昧  
正受

白文

此寺而來、大開、咲、吟、石、就、落、韻、詩、放、得、下、生、苦、常、帝、  
五、峯、前、雙、欄、後、獅、子、窟、中、各、異、歌、

淨慈 知惠贊

乍二

極愚

極愚

玉室和尚外題

玉真和尚副簡

天室和尚副簡



〇〇園悟克勤



三十 無款駿骨圖

絹本着色

聖古九文 横九寸七分



元の龍共開社子美の瘦馬行の  
 意を取りて瘦馬図を作り自ら  
 詩を題して云一棧雲西務降天  
 關空盡先朝十二關今日有誰  
 構駿骨夕陽沙岸影如山と楚  
 關の瘦馬圖卷ハ今ハ河部氏在  
 藏館の物なり此圖軸ハ本致を  
 此も元朝を下りたるものなりし  
 是ハ杜詩の本つきて作らるる

もつろし能書畫は墨筆の瘦馬のこり花是は粟也馬、赤  
袍の圍者を添えろろ為、及映喜好し

三十一 聚頭扇

表 金箋 沈石田淺絳山水

咸化元年仲春望 沈用 乍一 晒

裏 白紙 乾隆御題

聚頭貢高麗、較為始成永、名流揮翰墨、亦十留任蹟整秋  
亭對飛瀑、清絕非凡境、石田之所為、託意殊堪首、咸二遊  
暑在、此趣恒親領、

己丑仲夏月下瀚御題

十一



湘妃竹の骨翡翠玉の要明時代の摺  
扇の様式を知ると得し石田の秋  
景山水布帛整暇盈尺の中、無  
事の山河を双む合作とよし乾  
隆御題、熱河避暑山荘遊幸  
中の作をくし把玩措かろし此  
想見すし紙尾、墨濡ろる諸筆  
の階、巧し、ろろとよし却る皇  
帝の指紋を留めろる、と一奇迹を

三十二 肉文巖上觀音

紙本墨畫 豎二尺六寸 横一尺二寸  
一文宇肌帶 蒔莖地一重蔓古有樹



中廻莖地子墨菴福壽全個  
上下若物聚万以應儼子  
牙切軸

白衣大士巖上、女坐寸魚崖の辟藿輕く垂れ膝下深  
淵、臨心之志趣間暖き



三十三 雪舟 瓶花圖

紙本墨畫 豎二尺五寸五分 横九寸  
一汎漚地全個 中莖地全個 上下紙子  
梅一枝、寒筆古淡之、若乃梅標ハ空町時代の汎漚

と知らんきりく五華の祖と角曹順、雪舟曰時の人方は、  
世圖、梅花の信の最古のものとして

三十四 秋月猿猴

紙本墨画 望三尺二寸五分 横一尺三寸五分

一 川茶地仙全 中 唐花譜地全圖 上下茶地信

下 一 朱字文曰 東海秋月猿書

三十五 冬款 杜牧像

紙本淡彩 望三尺五寸五分 横一尺三寸五分

一 凡 白華地全圖 上 迴上成抄 上下銀閣  
清山巖松外題



楊州雲雨十年情、情海無求偶雅名、禪榻消愁豈無絲、  
雪、之落卷風与一身輕。

杜牧像漫題一絕 天澤七世東海一休 卡一

畫、冬款字凡、曾我龍足と博考とのより、衣褶の線描、

片隈を施したる慣業の手法注をす人きたり一休の言、  
二様あり一は大灯圓師を模して濃墨を以て揮灑するもの  
一は間涇鉄を模して淡墨を以て澆掃するもの是を此  
題賛ハ流者、席するもの逸品なり

三十六 雅聖助山水

紙本墨畫 縦一尺三寸 横一尺五寸

下二 長方朱字 朝隱 堂下朱字 之信

行野正信の子元信の弟なり元信より得る處多きこと如し  
父兄と異たる處ハ稍南氣候なりと堂屋中席を朝隱と  
云ふハ王右丞、私洲すうら考、あつたらう

三十七 程正揆山水

紙本墨畫 縦九寸八分 横一尺二寸

地僻山方靜人稀草々深四藏沽酒店客醉々狂吟。

青麴子 乍白字云 青麴子 左下朱字云 青麴子

田朝畫徵錄云程正揆青麴道人と稱す堂類事未  
の進士法初光録仰とあり又司空、至ら山水と善くす初  
筆序を原として其指授をばつら、迄ハ明自、機軸を出  
し多く先筆枯初簡先なり 既品尾集、云廣宗元明以末士  
大吏詩畫を並ぬらよの代こと、教人なりす青麴先生晩出面  
をら俱、擅場なり詩と畫と皆逸品と登らる





地  
子  
人  
三  
二  
一  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

三十八 丁雲鵬 釋迦

絹本 淡彩 横一丈二分七寸  
仲弟子丁雲鵬敬寫 年二

白  
雲  
鵬  
印

朱  
南  
明



程君房の程氏墨苑五十卷載す所墨苑の原畫ハ  
墨以丁雲鵬の筆ニ成リ其ニ南羽ハ意匠湧ク如ク

細線白描、妙を得たるものなり。此樹下石上釋尊圓、  
大線にて而も傳彩、筆力極めて道筋たうた珍と云し

三十九 常信 潘閻騎驢

紙本墨画 縦二尺二寸五分 横一尺四分

顛倒世途、倒顛出入、潘閻騎驢、身不自得。

黃蘗 獨立題 卷二

天外二 白字  
阿久

余り生家の泉州堺に在り余々母の和州丹波市在西  
井戸堂村の人なり明治十年母帰寧の日人まゝ母に  
随ひ行き親戚の情話に數日を請す一日里人果一社を  
携へ来り之を展示し余々之を獲る顛末を話して

云人より七年前廢佛毀釋の所布令嚴しき時和州  
一之宮石上布留明神の別當内山永之寺の住持縣吏の  
臨檢に遭ふ自ら進て云ふ様々眞道事人日限り佛法  
を棄て、神道に轉ずし且證據の断との面うとて  
編吏の面前にて自ら鐵を揮ひて本留寺文殊菩薩像  
を眞向より打毀ち在り編吏は其毒胆多恵の所業を  
惡みて即座に住持を追放して去りし在り里民の怨を  
殺到闖入して手當次第に屏障器四米麦塩毀壊せ  
眞意し去りし其日此噂を聞き傳へ透れ馳せ、寺内  
に立ち見れば圍院一空何物も獲る所をうりうり  
各打しなうら深入して方丈に至り見れば床の向、此一軸  
挂りの在り是で仕方がなれと獨語しつ、取外して

持帰りその佐柳、上げて数年を待つ、人々悦び起して  
持来り、燈ををせりとよま之を親て大く喜ん、携ふ  
る所の錦繪と交易して全の有り、帰す所一巾軸又以て  
時運の推移を徴すへきをなり

四十 大雅堂 高士觀瀑

紙本水墨 望三三子云云 松二八号

先師鳳洲先生の遺愛なり、先生の御里泉南山岸  
和田、山岸藏ふと一、長者あり文人、墨客、此家  
、遊踪を駐むるもの多し、大雅堂と名、岩となりて  
幾旬日、酒、親きて、曾、筆を絶らざり、一日出遊

して之く所を知らず、月夜、こゝて瓢盃、啼来、手、一壺  
を携ふ云、是、那智の水なりと、筆硯を命、那智水と  
滴らし、白う、磨、一、氣、何、成、す、以、の、の、即、是、なり



全幅、墨痕淋漓、而も一滴の水を着け、高士とて、作  
て、紙外、軽、この、細音、を、聴、く、む、ら、奇、楳、なり、先生、之、と、山、岸、家  
より、獲、て、愛、賞、惜、く、す、し、もの、なり



四十一 高陽山人蘭亭集卷

紙本淡彩

堅一八二〇七六 長十寸八

題字 蘭亭集

東江源鱗行書

詠高陽山人蘭亭集古詩

東江源鱗并草書

跋

東江源鱗楷書

明治九年の春のちりき余ウ故  
郷泉州堺の土安寺とらる禪  
刹、書畫會の催ありて評判



高ウリ花ハ余ハあざむ十五歳のサ  
年ち花を父ハ成以て觀覽ハ余急  
けりる重子何をら知らん唯吾  
我夢中に見て行く中に正法  
寺和尚出陳の世長卷を見ても  
何とはさし、深き意味を感一  
つり筆をうらな正法寺ハ余々家  
の菩提寺なり 和尚ハ照堂上人と  
ハハ静堂と号し南畫を善とせ  
余ハ最早矢七指たまふす父別  
れて直し正法寺、筆り方丈、駈込  
し彼長卷を世賞い受けんと強



請しつれを寧ろ頑童の戯ふと  
 思ひ做して取合つてもまじう日  
 毎に行つては説けども和尚頑と  
 して聞入れも一日方丈に聞入し  
 るに和尚不在なり壁に大字を  
 を書きしるを紙を貼りしあ  
 りしを剥き取り巻つておれ  
 持て帰つて和尚帰院しては  
 狼藉を見て大に怒りし我々  
 衆も来りて彼の方文字に大雅  
 堂の書こして我々秘藏から返し  
 給ふにふまに長巻をまはれぬ



問は何とては是は返さぬと言は  
 張つておせも大雅堂の書は其  
 任我々我々残り長巻に和尚の手  
 へ早くて永き年月を消ゆる其向  
 へまに東京に留学して久しく家  
 帰らざる明治より四年余に在外  
 三年の官遊を終りて帰朝し  
 美術学校長に拜命しつ時静堂  
 和尚八十五歳の高齡を以て遷化  
 しつとる報を得やうて護り量  
 親海和尚長巻を携へて余を訪  
 ふ是和尚の遺言を傳へて云此

長巻の正木郎君執着の品より吾、遊漫に長巻を以て  
 形見として進すべしと雅堂の書も改めて併せ進すべし  
 とのとき余は進懐の情、堪えざるを老和尚に回向供  
 養して長巻を呈助して克實とせり大雅堂の書も  
 吾徒の家の物とせり



四十二 抱一 櫻花箱子

絹本着色 縦三四九寸五分 横一八寸五分

抱一 暉真筆 乍一 七註

雛子、花吹雪に向つて群めら姿寫し得て妙なり  
 繪筆の経緯を稍斜して用ひたるハ若老飛颺の勢  
 を助くる工夫、出てるをくし良工の苦心を是るべき  
 也



四十三 秋暉 鳥花孔雀

紙本着色 四相徑一尺一寸五分  
 秋暉 花鳥畫の寸錦  
 大壁と謂ふべきなり

四十四 菊池容齋 西洋美人

絹本着色 四三二七寸四分 横一八三二寸七分  
癸丑秋 容齋 以上全紙 中一畫印朱字 容齋



癸丑の嘉永六年 黒船渡来の歳 容齋 六十七歳の  
時より前賢故實も既に成り人物畫に精進しその時  
の誠作より薄群を以て地塗を為し金髪碧眸の  
美人を以てして岩隈具を以て描く 黒田清輝曾う之  
を觀て驚歎し能く西洋畫人物描寫の妙諦を得し  
ると注賞あり



四十五 銅造如來像

高卅四分 蓮座高一寸 臺高五分 通高五寸三分

所謂推古佛中の最古素朴なるものなり此中一は  
隆衛擊乎を受けけるものに見ゆ臺座ハ此頃より正  
す又をわたりて光背并に臺座ハ香取寺真の添加なり





四十六 健陀羅也銅佛  
高三寸

四十七 新羅銅造菩薩像  
高三寸 臺座一寸

四十八 銅造菩薩像  
高寸下 臺座七公  
通高三寸五分

所謂權左佛なり右手  
瓶を持ち左手蓮華  
一莖を執りけし華は  
已に散損し僅く茎端  
を残せり

四十九 木造着色不動明王  
高寸五分 臺座一寸

鎌倉時代の作なり作者を詳しせずといへども名工の作  
なりといふに足らざるや像を化も威容儼然として人迫



ろと宣布 面貌 頭髮の直家快さと剣索を執る両手の  
張暢さと相對し上部の半裸体より、及し胸部の衣褶截  
全に緑色を以て花飾し均細細緻を極む



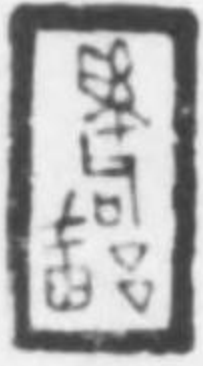
五十 木造大黒天

像高五尺八寸 像座寸 通寸七寸五分

臺座裏墨書記 大黒神山之坊村金勝寺北之坊自海

像座の上、まを抛頭巾を戴き右拳を握り左肩に掛ける袋の一端を左手に握り右足より踏出し、まは行走大黒、一七古司の形像なり臺座時代佛師の作をくし

五十一 漢雄雞泥象 高一尺三分 長一尺 羽渡六寸  
 矯ニ了雄姿状一得て力有り手法簡朴雄健を  
 近年山西大原府附近、玉笋玉釵と共に出土せりと  
 傳ふ全身銀爛色を呈す



五十二 篇文古重

自異鈕 長六分五厘 横三分七厘 重五文

文曰 尚句 邦

余此重を考て是古香を考ひしと本来文字の字に殊なりと云ふに解讀するに能くを依て直に是本を高田竹山先生に呈して考説を乞ひし。返書の一節に云ま。近來希見の珍品にて歎賞の至、侯別紙石取敢致謹致。何同一應即覽、入臣所陰、て拙著古竹篇中、一彩を加へ申免段、字果の幸福、不過之候云。

竹山先生の考説

按尚句与嗣通、又与司通、句与句通、曾句匹、見嘯堂集古薛氏款識、博古圖等。蓋司句者、經傳之司寇也、周礼秋

官司寇疏、引鄭目錄云、寇害也、秋者道也、也秋義殺害、双聚斂載於篇物也、天子立司寇使掌邦刑、刑者所以驅取惡納人於善道也、今以司句匹及此司句重證之、鄭氏說甚混矣、其云双聚斂載又驅取惡納人於善道、此明句字義也、其實句、為正字、句本義曲也、轉為凡、終繞而拘束之義是也、若夫寇暴也、害也、曰司寇者甚多謂也、要漢人疏於古文、鄭氏不察司寇之寇、即句字假借也、凡經傳司寇三代器銘、作嗣工、又司徒、作嗣王、嗣竹篇文辭、字与司通用如上所述、而空為工假借字、徒為土假借字、空以穴工聲、徒从足土聲、皆同聲通用耳、器銘与經傳、互有通用如此、今又據此重及匱文、得司寇本字、以糾漢人之誤、可謂學者之至幸也、又說文邦字、古文作苗、今據此文作苗、彼

元當作苗、此篆从邑从田半聲、邦國之有田可食、字國當  
以田、會意首作邦、又作苗、都是古字、正文可知矣、司句邦  
蓋司殺職所用於采邑者耶。

癸丑之冬 訖文樓主人志周未定稿

五十三 大和古印

圭頭鈕 方一寸

文曰 女 安の首字、

傳世永用の為、虜陷悉漫漶せり

五十四 文三橋田黃印

長方 長七分五厘 短四分五厘 高一寸二分

文曰 山水癖

布字の妙、奏刀の雅、言ハハラシ、清末の鴻儒潘祖  
蔭傍喜、益の清玩、くしとのそり

五十五 金印 文曰 永壽康寧

瓦鈕 方八分 重三十二分

大正五年朝鮮大同江畔樂浪郡治故址、於て古墳中より  
玉印を得、了居攝三年の延年銘ある漆器の伴出、依り  
前漢時代の物と知り得、了玉印方五分、款文永壽康

寧の四子漢篆の秀妙前出の漢銅印に於て常に見え  
 る所なり香取秀真氏昭和六年其文字を規仿して  
 稍廓大し款文を改めて漢文として鑄成しその印是

五十六 古銅印閣

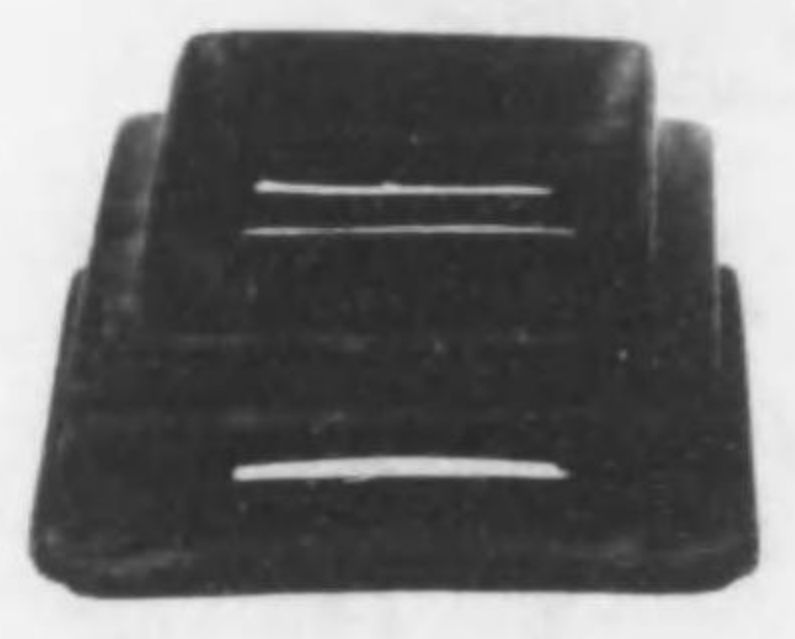
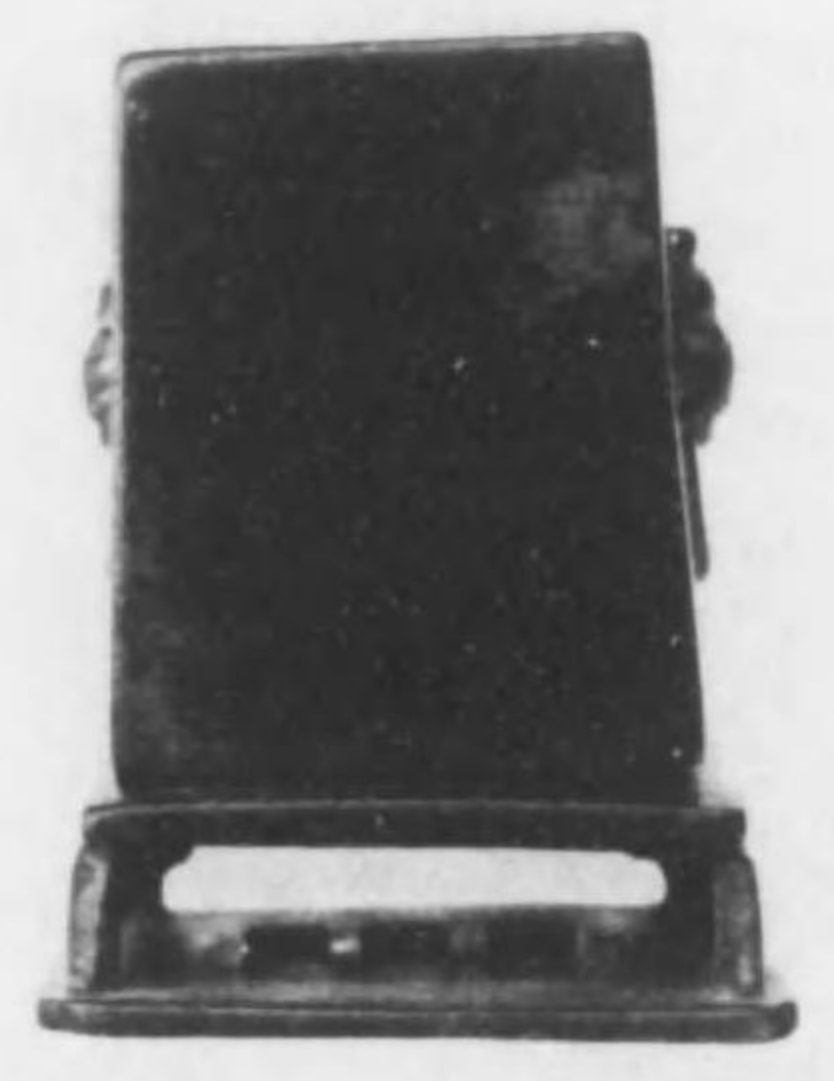
臺座 底面二寸四分五厘方 床面一寸二分五厘方

高四分 立上り二分

覆蓋 上面一寸二分五厘方 下面一寸二分五厘方 高一寸二分

印閣通高二寸七分

臺座側面三方格狭間透し 印座を機床とす 立上りをして  
 西邊蓋を承く 覆蓋は口方溝として 兩側面、押面無銀の在飾あり



五十七 神獸鏡

徑三寸五分 重五十五匁



中帯と十一方格ありて一格一字君臣高官位至三公樂未央と讀むし内區ハ乳ちり乳頭四窠あり宝玉を嵌入せり内紅玉二黄玉一碧玉一蛋白玉一り存一三窠の嵌玉ハ佚脱して存せり

五十八 四神仙人鏡

徑三寸五分



二段の鏡蓋あり中帯の文字は尚方作竟真大佳上有山人不知免と讀むし中區ハ六乳あり其向ハ四神と仙人二座を配す四神の中北方ハ玄熊を配す人物ハ夫婦母子の如く大人ハ皆危坐せり

五十九 海獸葡萄狩獵文鏡

徑三寸六分 像厚四分  
重百二匁



海獸葡萄狩獵文鏡ハ  
極めて希有の例、像す  
世鏡は外區、毛衣を  
着たる獵人右手を舉  
げて、投擲の状を為す  
とのと、顯す外區、既  
する飛走の中、有  
翼馬を見出す、以珍  
とす。

六十 雙龍文鏡

徑四寸二分 重五十四匁



鏡背漆黒、變し用  
邊の半部ハ青琅玕  
の如く玉質、變せり  
傳世古色、ありす  
水中古色、土中古  
色、如何遭遇、依  
て斯く美化せらレ  
たり、知るよし有



六十一 瑞花鴛鴦八稜鏡

徑四寸五分 厚四分  
重 百六十三匁

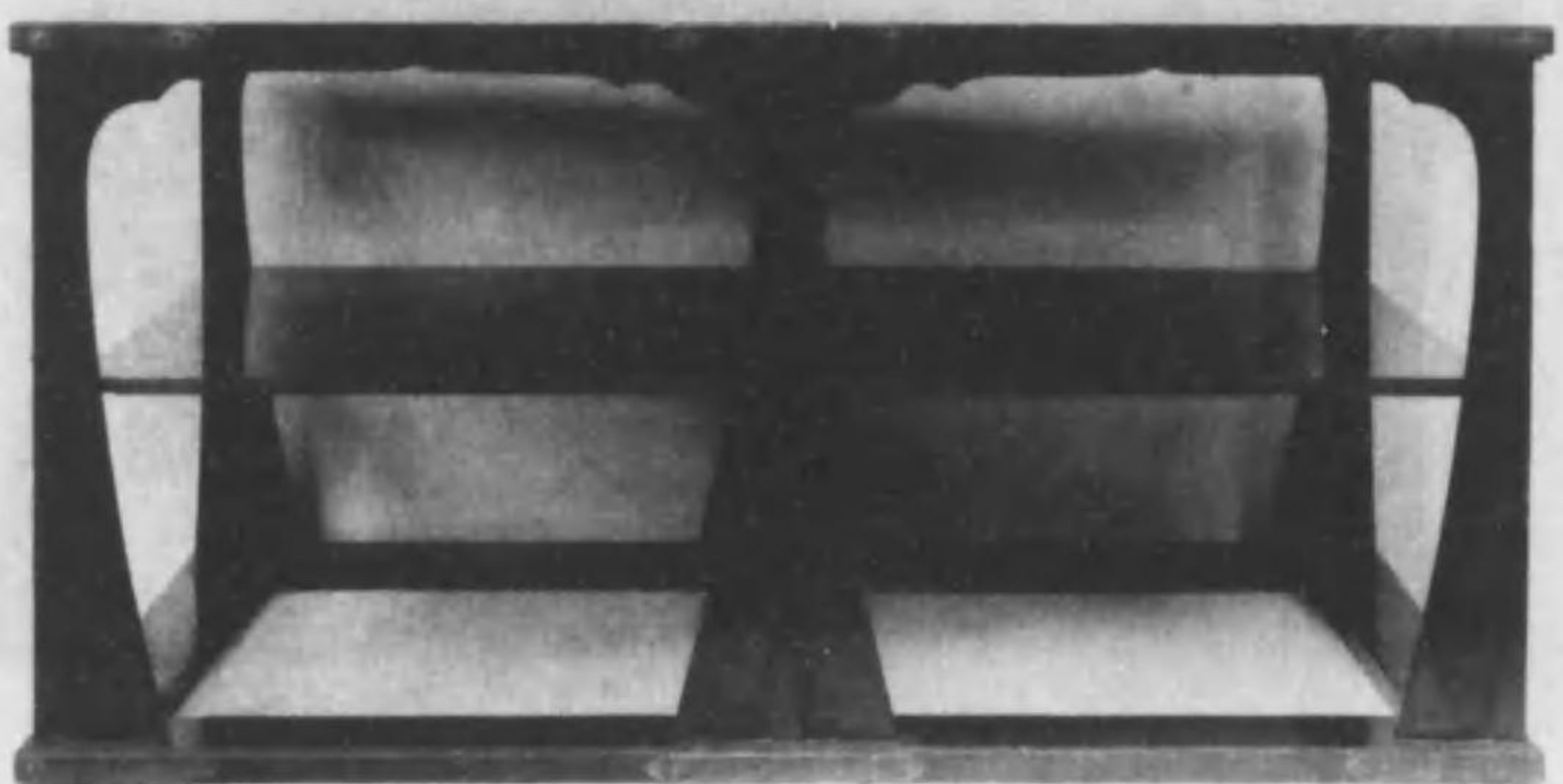
唐式鏡より出てくる  
藤原朝の倭鏡として  
製作精美完好なる  
もの一たぐ傳世古色  
盎然として出まらし

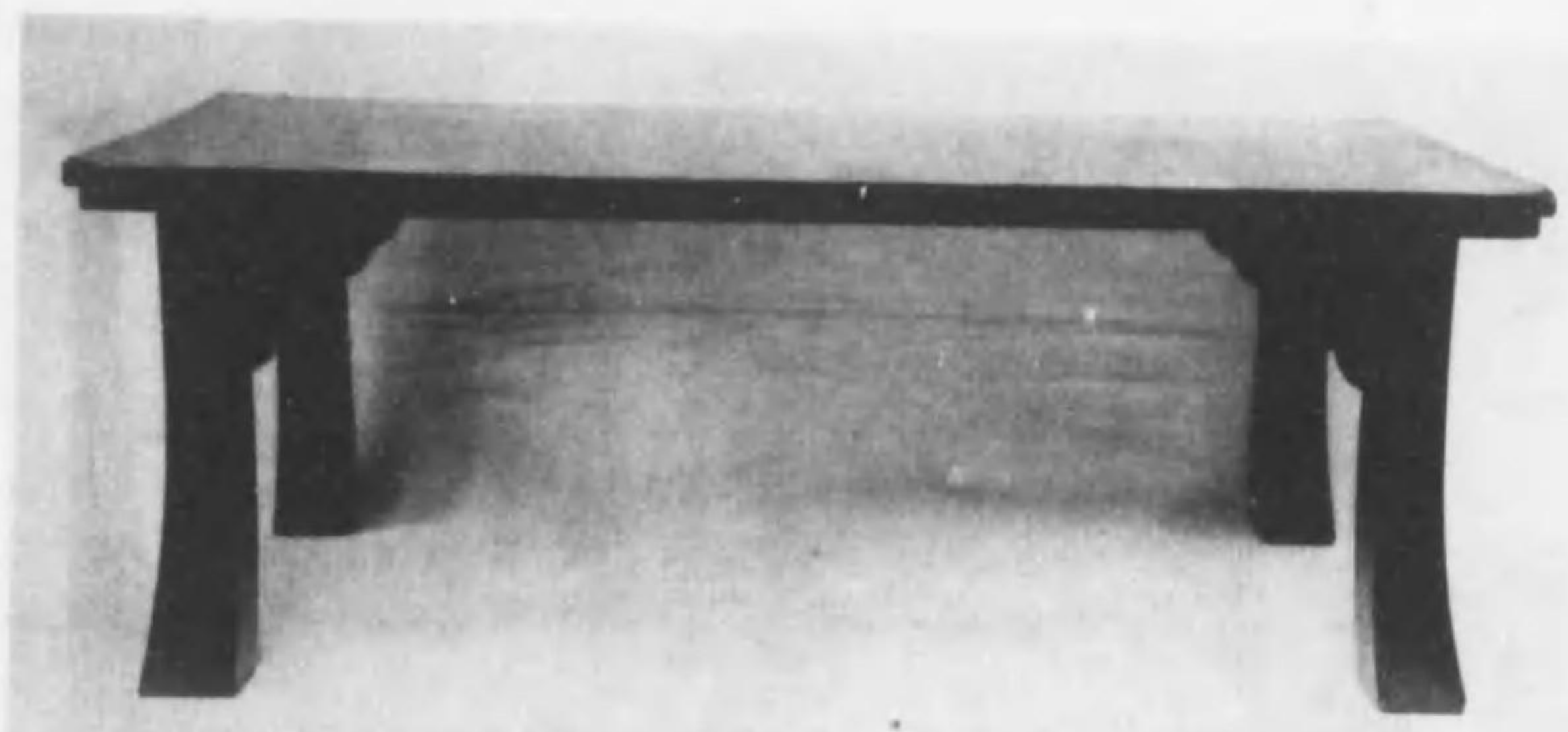


六十二 脇机

長三十三寸 中一と三寸  
高一丈八分 五匁

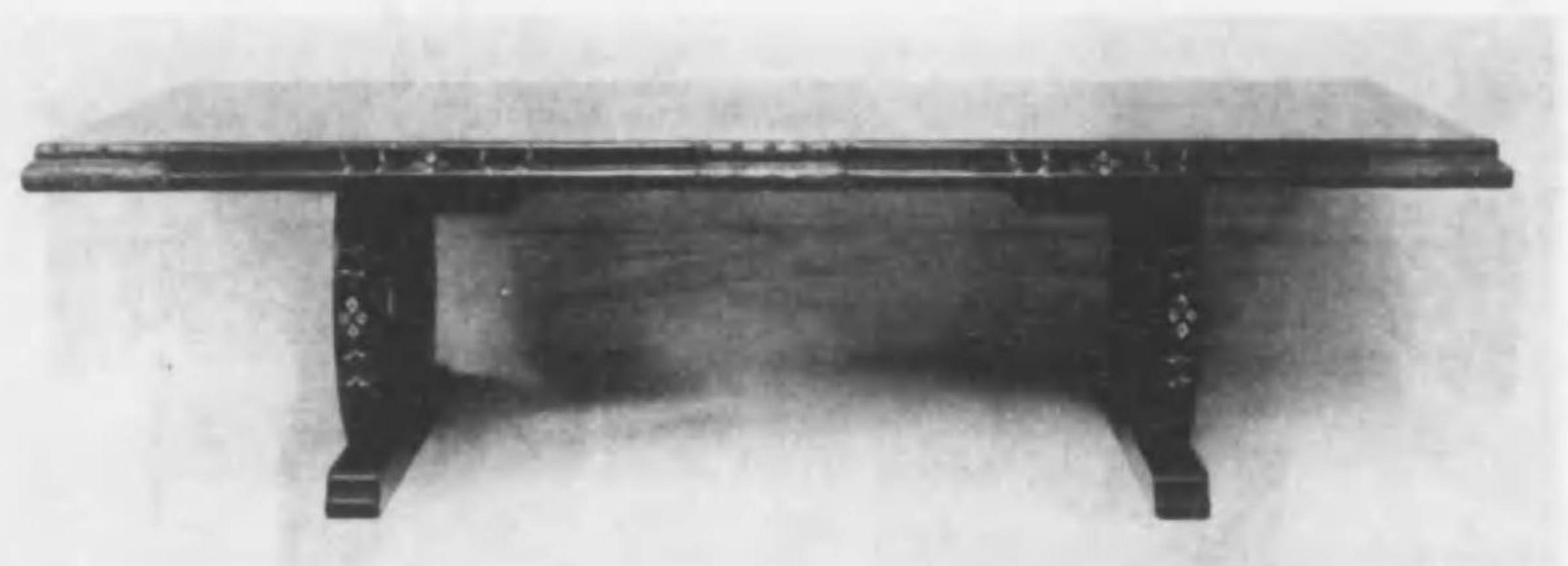
貞治壬辰<sup>1254</sup>任上木層子の通受<sup>あきう</sup>松後向  
の優美金具のお方<sup>かた</sup>瑞瓜<sup>ずい</sup>紅の面一杯  
こちち端<sup>はし</sup>に千りせ見せて軒快の意と  
与く<sup>よ</sup>芳凡<sup>よし</sup>作、あらずを鎌人の世代の  
物<sup>もの</sup>をうへしおね細、見れば厚五分の  
甲板の下端に五重のつが面、爪紅と差  
せぬ甲板は四分五重の厚なり、見ゆる百五  
五分の臺<sup>たい</sup>輪も上端に五重のつが面と  
取れ、赤四分五重の厚なり、見ゆる臺輪  
の上、甲板を支える四本の隅柱と前後の  
支柱も四分五重前とすれ、甲板臺輪  
の厚なりと相成すは是丈とて細弱、して  
荷重、耐えず故、柱間、格段向板を  
入る此柱の厚なり僅に三分をれ上部、甲板  
を支えて持送りの用と淋し下部、寸五分  
の廣サ、踏張<sup>ふみぢ</sup>故、隅柱の所、二直前  
と着し柱の本サと合せし一寸九分五重の前  
柱と同様の荷重力を持つととなす





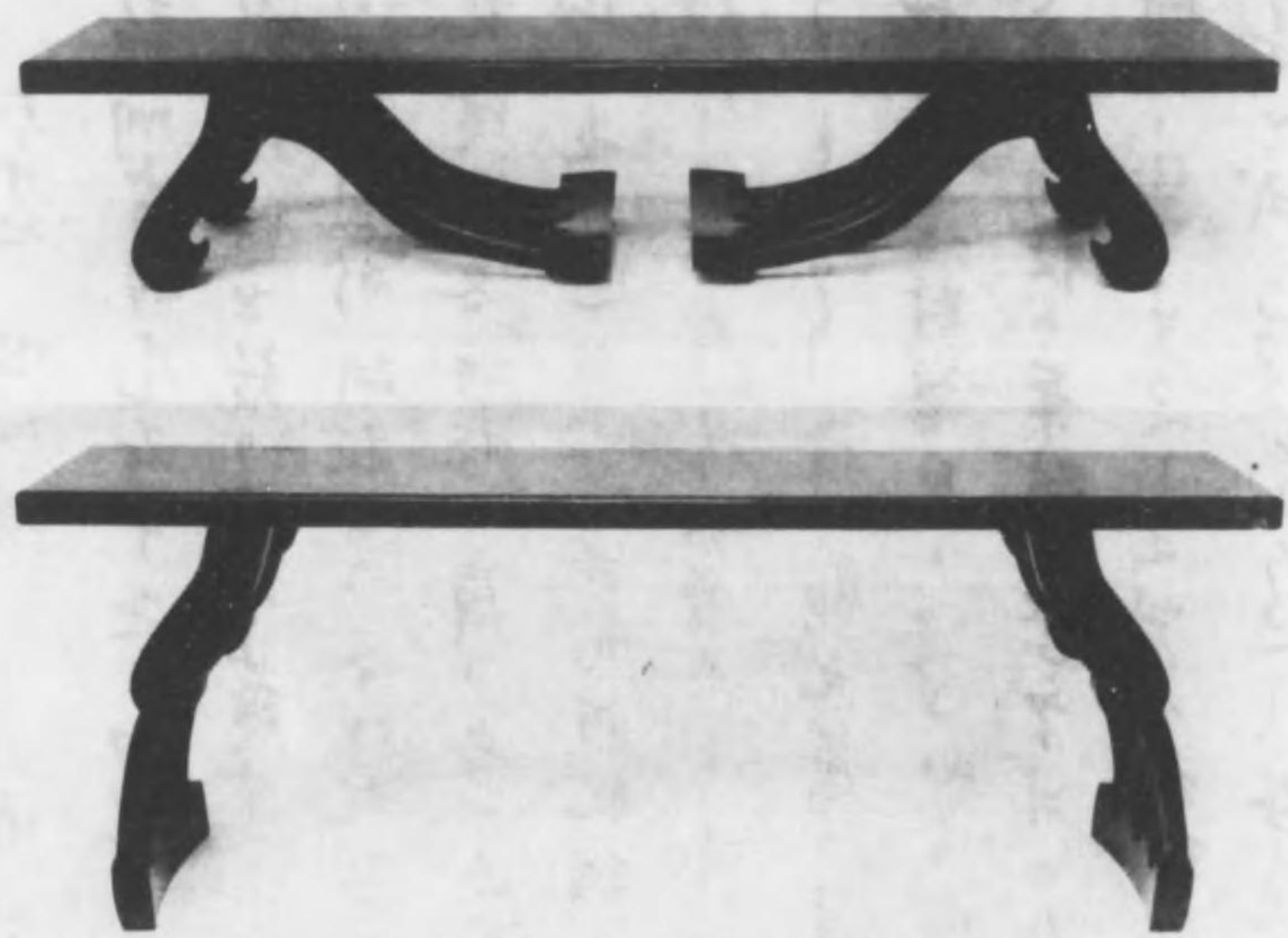
六十三 支机

甲板一枚板長三尺六寸中一尺二寸五分  
 甲板の左右両端に心持上及び下  
 葎透しの用を淋す  
 甲板の厚サ七分之二寸一上端厚サ  
 二寸五分下端厚サ三寸五分上端より  
 下端の入り方の重  
 三寸高サハ寸四寸上端中一寸二分敷き  
 中一寸七分  
 足付甲板下端より横二寸五分前四寸入  
 足付四隅ハ八寸所堀目付持送り下り横  
 共二寸五分  
 鶴ヶ岡放生會十二番職人繪合五番  
 左繪所支机、人子し古き時代の支机の  
 形式なりし



六十四 溜塗髹向長机

甲板厚サ一寸之とニヤクリ面にして上下の  
 二部を上下部と厚サ四寸下部和厚サ六寸  
 とりて上端の長サ三尺四寸五分中一尺二寸四分下端の  
 長サ三尺五寸四分中一尺三寸四分四隅と前後の寸共  
 唐草の銀蒔絵しる鉄金具と打つ金具と金  
 具との向ふに極子之様の埋向と面より施せり  
 足高サ七寸五分厚サ板の縁足を板の厚サ寸  
 一分前後に全一埋向を施せり是は古き時  
 代机々好事家の好みて金具と埋向と  
 を添加して完成したるものなり



昭和九年朝鮮樂浪の古  
墳より此堂の要部と認め  
し、其教團の本所を菩提  
寺、小塚恒吉氏、依て複製  
せしむるもの即是なり、此  
堂は起坐自在にして脚を  
立て八高、八寸の堂と、脚  
と異なり、高々四寸の几と  
堂脚や八足の形状構造  
の巧思、實に驚くべき  
あり



六十五 紅木机

長三丈二寸中一尺七寸五分  
高一尺二寸五分

全部高貴なる紅木を以て  
作らる机ハ、希有觀る所のもの  
なり、本南齊、在り大明宮  
迄のものと云傳ふ、余自ら彼  
地より將來するにたり

六十六 樂浪出土古案復原

甲校 長二尺三寸五分  
中五寸五分 厚二寸五分

高起八寸 坐四寸

六十七 凹心硯

由三尾寺中 最長寸下 高一寸八分

歙州古龍尾石中央に凹池あり長徑二寸短徑一寸八分雙龍池邊を繞りて之を護する所の如し凹池を圍んで三箇の楕圓形研板あり各研板互に聯續せしむる例也凹心と稱す各研板の肩、各一匹の大蟲一は左旋一は右旋し山上水邊雙龍三虎相馳驅するの池をみず其彫琢豪健、一は怪奇なり此種の如き硯、嘗て硯譜、採録せられたるものあり宋の顧文蒼、負暄雜記、晋人以凹心硯者硯磨景時潘身といふ如く凹心、景潘を貯ふとするとき、研板の筆鋒を整ふ用とあり、止まらば硯の唯一の研板にて筆毛をへし又凹心と水漏とありとき、三箇の研板、各色の墨で試し得るといふことありし、畢竟宋末の目達兩龍、紅らばと



六十八 端溪子石目瞭好消息硯

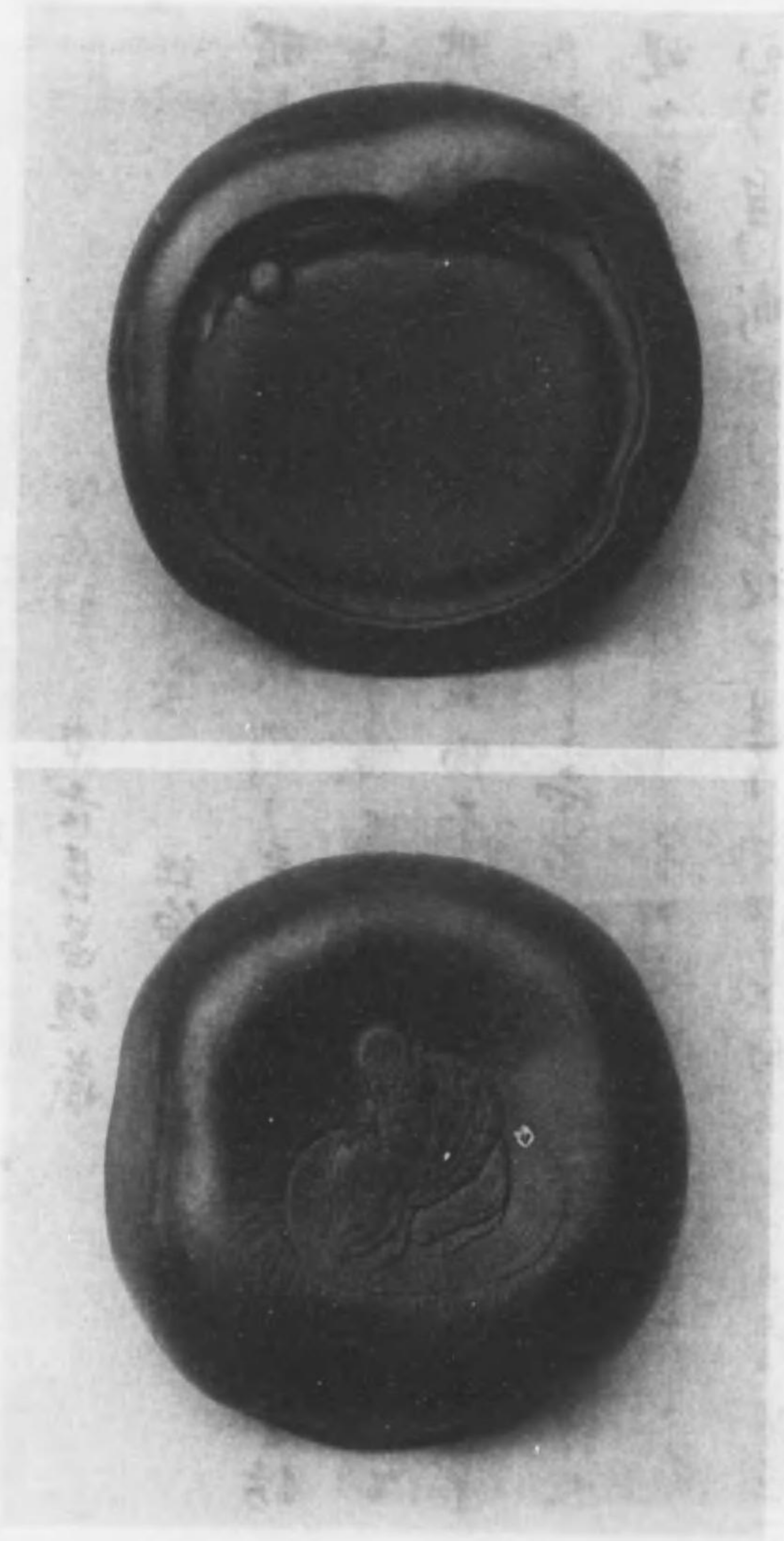
長徑寸五分 短徑一寸二分

萬曆假子之被服、貼了布箋、題一云無上妙品宣和子石翠綠治眼目瞭好消息硯已交三月得之郡城考氏是川張忠容鏡珍護とあり又匣底刻す硯銘云

雲氣凝水澤靈、温厚德輝朱形、羨壽文富六經、傳若山靜中瞭。端溪以子石為貴宣和後子石尤不易得此石天也妙質品格神奇洵希世之寶

研農 玉麟

とろ硯面は目の形を成し背を凹めて壽皇を草座、蹠し目を掩之の復容と浮彫す世俗目瘡すとき久やうて好消息来るの徴とすす意匠の妙人として一嘆と羨せしむ



六十九 澄泥硯

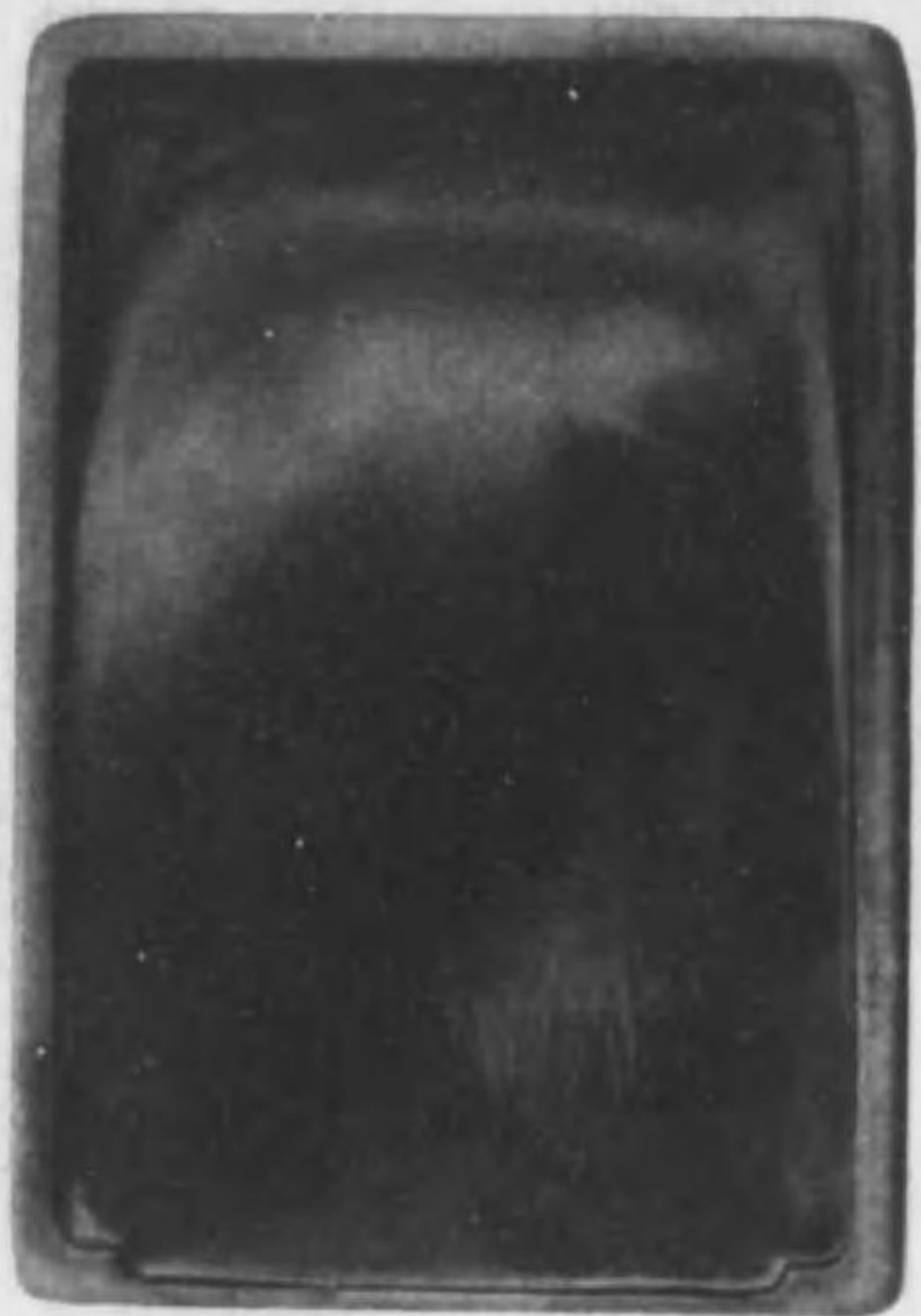
長三寸四分 廣二寸五分 高一寸五分

側面刻 安吉長昌硯藏

蓋 花梨 任伯年畫蓋蓋刻

昭和辛未余全西遊して杭州、至り長昌硯の舊廬を訪ふ時、垂翁泣して既、年餘長子東遊君喜ひ近て此硯を余に贈ると云是、微物なりと之も先人自運手澤の物なり幸、之を保持せよと尚云先人昔時古製澄泥硯を藏せし、過て之を毀損し、破片を棄て置たり、忍びて自、彫琢して少硯を造り、同學任伯年蓋の上、舊日跡を因りて自ら刻し、是、先緒丁亥の歲を、余來甲午、之を愛用して身邊を離さざりしものなりと所謂

鱧魚蓋にして堅重細潤羨暑速くして且細なり



七十 梅月硯  
 長七寸二分 中四寸三分  
 厚四分五分 重二百三十五匁  
 室町時代和硯の一なり別々、京都松永氏所藏、松風  
 硯より之と曰大日意匠に成りしものにして、口家にて、彈正忠  
 所用と傳ふるなり。



七十一 蘆月硯  
 長七寸 中四寸 厚九分 重四百七十四匁  
 桃山時代和硯の一なり世々豊太閤所用、蘆ノ時繪鞍骨  
 ；永徳下繪の骨屬して、傳存するものあり、此硯の蘆の繪  
 も永徳を想起せしむるなり。



七十二 趙陶齋陶硯 長四寸七分 中三寸七分 重五兩五錢  
 陶齋趙氏名は養字は仲頤とし息心居士と號す長崎  
 人トカワレ或ハ清人趙氏の子  
 とし子初從とそり黃蘗山  
 庵、從ハ後歸俗して四方、  
 南遊す晚年泉州堺府  
 に来り枸杞園をトリて居  
 る天明丙午、没す人と考り  
 字輩不羈書法を善く  
 一筆刻し精一類春水



ナ時梅崖増山雪齋、書法を陶齋に受けしよりそり

七十三 杜園 竹硯

奈良人の形の名工森川杜園造る所而して自に受用し  
 一のを竹硯表に真向の鹿を彫刻し裏に鹿廼家  
 造之と彫銘し根付も竹を用ひ表に二枚の紅葉を散  
 らし裏に杜園造と刻し、緒締は埃及の精繪玉を  
 貫きしり





七十四 古銅硯滴十種

一 牧童 二 爛柯 三 玄武 四 螯山

五 獅子青 六 獅子黃 七 水飲獅子 八 兔

九 翡翠翠 十 鳩

硯滴各種の中、古銅製にして人物禽獸の形物十種を  
 選上世中玄武ハ之と形次寸法少く遠くもの二種を宣  
 和博古圖、漢龜蛇硯滴より採録し志記述を加へて云ふ  
 二器硯滴中奇玩也、作龜魚蛇、而有行勢、背為圓空、可以  
 納水、中是口銜物若蓋狀、遇水出則吐、蓋中製作精妙、宛有  
 生意、非古人不能為也、按龜蛇北方獸、主水、用以飾此、甚取其  
 類耳。是より中ハ玄武ハ硯滴の最古様をうかす





七十五 銀錯恠獸書鎮

長三寸三分中ニ寸 高三寸四分  
重百五十九匁

恠獸の形獅子頭、一七顯、鬚より四足、  
一七前肢、羽翬あり、尾、垂れ、地曳く  
通体銀錯を施し  
毛状をす、漢器也

七十六 鍍金行龍書鎮、重三寸五分

長三寸七分中ニ寸五分 高三寸五分

黄龍首を卷りて、淵牛睥睨し脊梁  
以て張りて尾端は股間、纏絡し通身の千  
鱗、皆動く如く、縞ニ、る姿勢よく、迫り  
の堅あり書鎮として可、筆架とす、も、  
妙なり、六朝物とす、



七十七 金銀錯鳳凰書鎮、重百六匁

長三寸中ニ寸八分 高三寸五分

鳳凰翬を載りて五角形臺站の上、  
立ち、顧眄の状を為す、羽翬、首尾、各  
種の文様を造り、金銀を以て、鑲嵌  
し、黄白色彩を成す、句容、鈎、器の一、なり、

七十八 古銅蘭亭書鎮

唐末、宣德、元年、内造、清玩、二字、  
甲、片、の、刺、銘、あり、

高士水邊、坐して、左手、体を支え、右手、  
卷、丹、を、執り、側、筆、硯、を、置、く、水、中、に、鸞、鳥、  
游り、白、く、是、山、陰、蘭、亭、の、光、景、なり、



七十九 青磁箕木手香爐 徑四寸五分 高三寸五分  
 所謂天龍寺青磁の上乗なるものなり

八十 古青磁香爐 徑三寸五分 高三寸五分

八十一 青磁唐冠香爐 七舎文與鏡乾也作

八十二 白定身付香爐 身渡四寸 耳迄高四寸

八十三 黄瀬戸香爐 口徑二寸四分 高三寸

鐘入り襷、蓋溜り、口ゲあり、身身変りの如く、墨色  
 能くたるものなり

八十四 繪唐津香爐

口徑二寸五分  
 高一寸九分五厘

八十五 古銅鹿盧鏡

口徑二寸六分  
 高三寸二分  
 把子長三寸四分

三脚と把子とを具し、  
 唐盧鏡なり近年朝鮮  
 へ發見せし、樂浪時代を  
 傳せし、漢器なりし、後世  
 へてハ香爐として使用せら  
 れたるもの如し



八十六 漆付香合 三種

祥瑞開扇

吳洲水鳥

吳洲食籠

八十七 楡出香合 三種

唐三彩

高麗雲鶴

白瓷鏤花

八十八 異國物見立香合 六種

印度モール合子

暹羅銀手洗キントクセ

和蘭士那補

法蘭路易十六世ボンボニエ

英蘭ウエッヂウー封燻入

蘇蘭虎玩具



八十九 髹漆香合 六種

鐘人君彫

牡丹

玉楮象谷

堆朱蟹

大質豐助

药将首寫

白山松哉

蘭奢持香桶

白山松哉

花盡藤實

堆朱楊成

屈輪



九十 漢銀錯壺

高四分五口徑三分底徑三分  
腹回二分七分 重七兩九分

通身卧螭文様を以て覆ふ口邊に細き帯を繞らし之に雲  
漢式文様を銀錯せり肩と腹、稍廣き三筋の帯を繞らし  
帯に微中凹して是も同様銀錯文様あり腰に銀錯銘  
文三行あり横書す文云

緡和元年供工譚為内者造銀錯壺、護相守番文、棟椽並  
主右丞楊人之賀省、容六升半重十斤十三兩。

漢成帝緡和元年は西曆紀元前八年に當る供工の共工、全し漢  
書百官公卿表、垂作共工利器用とあり内者とは宮掖の事を言  
内儀とよろかし護相番文、職名を漢書に番文職職、詔祖統  
とあり守の筆務を持ハ人名椽、属官主、量事、右丞と令  
とは官名楊と賀と共に人名省ハ省察監事也



九十一 漢金錯小壺 口径一寸五分 底五寸五分 高一寸五分  
 鍍金文帯ありて口辺を繞る底辺に接して金錯鍍齒文あり通  
 体細微なる金錯を以て波濤汹涌の状を寫せり故乃實  
 譽歎之べきなり

九十二 漢宣素燒壺

口径三寸七分 底径四寸二分  
 腹圍三寸四分 高七寸

粟浪出立の一點灰色の壺なり口造り鏗口く二箇の丁字耳  
 あり壺の上端に三匝の三々肋あり漢宣之壺中於体多く粗を  
 入るもの一なり

九十三 漢宣狩獵文浮彫壺 口径三寸五分 腹圍三寸七分 底三寸五分  
 高七寸 粟浪把袖肩に厚肉の狩獵文の彫あり

九十四 緑釉劃花圓筒 口径四寸 高四寸五分

緑釉還元して銀爛色を呈す劃花漫漶して何の状かを  
 辨しせんと上部と下部とに二帯を繞らし之に各七箇の累座  
 を施えて趣を成す長安出土の漢器なり





九十五 南蛮漆白帝壺

口徑一尺一寸五分 内徑四寸五分  
 高一尺一寸五分 脚より高六寸七分

一面ハ牡丹の繪一面ハ西班牙國王のモノグラムを洋式花飾の中  
 に入れ描きたる南蛮國の伝記製品の中なるもの

九十六 李朝漆白鳳凰帝壺

口徑一尺一寸五分 内徑四寸五分  
 高一尺一寸五分 脚より高六寸七分

細竹管耳あり提柄く便なる酒壺を両肩、虎は生鳳凰は官行に僅  
 華方側掛一壺酒の七言對句を刻書せり

九十七 李朝燕支牡丹帝壺

口徑一尺一寸五分 内徑四寸五分  
 高一尺一寸五分 脚より高六寸七分

九十八 李朝燕支雲鶴帝壺

口徑一尺一寸五分 内徑四寸五分  
 高一尺一寸五分 脚より高六寸七分

九十九 波斯温壺

口徑一尺一寸五分 内徑四寸五分  
 高一尺一寸五分 脚より高六寸七分

帝壺として両面を標記人として中心に花の外円は老鹿の  
 して両面を同じ一面に胡蝶の散點文様一面に花飾の文様  
 あり明治四十三年海峽の胡蝶に於て之を獲たり

百 古瀬戸祖母懷茶壺

口徑一尺一寸五分 内徑四寸五分  
 高一尺一寸五分 脚より高六寸七分

肩に紐通しの四角あり舞糸切なり胎土細膩にして  
 沏と云ふ彩なり



百一 青磁粟鼠耳花入

径一寸七分 底一寸四分 高八寸五分

百二 青磁浮牡丹花入

径一寸九分 底一寸二分 高一寸二分

百三 撫順出土繪貴花入

口徑一寸五分 青磁一寸二分  
底一寸二分 高一寸三分

百四 仁清尺八花入

口徑一寸二分 長一寸三分

外向袖を施す鉄砂を以て数條の竹籐巻を模し、内向より上唇

に至りしを、袖と掛けたる、仁清の捺印を押す、寛政堂清玩の一也

百五 古伊万里錦手花瓶

口徑一寸五分 香臺徑四寸七分  
高一寸五分

底、大明成化年製の書鉄あり成化の青華五彩を擬し、そのなるを紅  
ろくし、喇叭口、矩形、身下、華、七、形、体、繪、傳、を、全、面、五、彩、燦、爛、す、骨  
部、青、華、唐、扇、形、開、光、あり、緑、地、金、彩、の、和、蘭、人、物、を、描、出、し、下、蓋、部  
青、華、菱、形、開、光、あり、白、地、金、彩、の、瑞、龍、を、描、出、せ、此、文、様、依、て、推  
測、す、是、は、馬、六、和、蘭、王、室、の、需、託、製、品、あり、する、而、し、て、偶、微、瑕、の、有  
る、を、遺、せ、れ、す、と、し、し、る、も、の、た、り、し、此、器、は、有、田、の、室、元、前、川、泰、通、の、家  
に、傳、へ、し、し、明、治、年、間、故、あり、て、家、藏、品、歸、し、る、も、の、た、り、す



百六 古芦屋 霰尾壺釜

徑二寸五分 口徑四寸五分

深五寸五分 鉄口松賣

口一文字微く面取り巧妙なる作風  
なり圓扁形牛之脛に雪耳下絵と  
傳ふるものなり

百七 古天明 遠磨壺釜

徑一寸五分 口徑三寸五分

深四寸五分 鉄口獅子

大接肩素紋の釜、鬚二つ  
獅子頭あり鉄口と云々、推し  
を取らざる



百八 道仁 責紐釜

徑寸七分 口徑三寸五分

深五寸五分 鉄口見

五三初改焼は釜は織田信長公  
所用をうゝと加賀藩家老意  
佐渡守之と辨領して具家、伝  
来し、うゝもの、信長の傳青山家  
の用途梅屋忠兵衛、伝へる具  
法市井、流蕩し、うゝと青山家の  
医師徳田寛正の治平年之と見  
出し、於此、うゝもの

百九 九兵衛 四方釜

徑六寸五分 口徑三寸五分

深五寸五分 鉄口鬼面

山形目時、九兵衛作なり



百十 青磁筭木手足付水指

口徑一尺二寸五分 高四寸四分

宋室の古青磁と云ふものなりし本末大音等とて是  
られしものなりし

百十一 青磁花卉浮文様水指

口徑一尺二寸五分 高四寸五分

三田侯青磁室を開りて奥田頼川の門人を請せんと  
せしとき頼川ハ上足の木朱を措きて欽古堂ハ亀祐を遣  
ししう木朱不満を訴ふ頼川云木朱を遣せし其造るに  
皆唐物と云ふし故に亀祐を遣ししと云ふと云ふ水  
指ハ其色光と云ふ其文様と云ふ其造る唐物以外の何物な  
らんと云ふ取し賜へし



百十二 漆白竹鶴水指 共蓋 替蓋

口径五寸三分 高さ寸五分 底径四寸二分

寛永年間柳屋より氏問より下りしものと云伝上座懸以前の物なり

百十三 繪志野口四方水指

径四寸五分 底墨色四寸 高さ寸

百十四 花順出土目付水指

径四寸五分 胴太サ寸五分 香臺寸五分 高さ四寸

百十五 木白赤層水指 共蓋

径四寸五分 高さ寸二分

春日社頭神前：諸白を献供するに用たる器の形を模し、  
その香臺底に「春日社の三字を刻せり外面に藤葛を巻白  
け内側に藤巻を色絵に描き蓋の撮は文打焼餅の形  
を木白く作せり

赤層山(木七)



百十六 陶胡瓶

腹圓四角 底徑三寸五分 高九寸五分

唐室白瓷の膽瓶にして腹大に頸窄し龍首ハ瓶口に瞰し龍の下腮擴張して流とちり龍身ハ提梁と成す流の下ハ雙龍鬚を仰めり隆起之様あり梁の下ハ六等支あり持す瓶形基礎形ノ流形とも、玻璃胡瓶より晚化したる形を有之様龍と雙龍鬚との漢標を存し葉支ハ希臘標に屬す蓋唐代東西交通大に開け西風東漸せしむる以て當日の世尚を觀るべきなりと云ふ流所藏の漆胡瓶ハ唐製胡形を有せり此等ハハ唐製胡形を有し之を私に陶胡瓶と呼ぶ

百十七 古銅水瓶

百十八 唐室水瓶

百十九 朝鮮石製水瓶



百十六の陶胡瓶

百二十 金輪寺御茶入

径二寸五分 高二寸五厘 蓋径二寸五分五厘  
 節 蓋地ニ蓮蔓申牡丹右金銀

後醍醐天皇吉野なる金輪寺の行宮、まうまう、折苜  
 高を切りて茶入をいづく造らしめゆれ之を以て蓋と殿  
 屋の武士沈吟等、賜りしと云傳へ今、遺存せしもの金  
 輪寺中茶入と云けり尊重すと云りこの中茶入、本山金  
 右衛門公高藏よりしとの呂製作傳説、叶し古色煙ナリ、  
 一の或の本質と云いしやらる。

百二十一 時代桐紋蒔繪中次 径二寸五分 高二寸五分

東山時代の物なり。



百二十二 三笠山茶

径三寸五分 高三寸五分

山と虎とを錫爵と一笠とを  
 知しり、蒔繪の杉木立を配  
 し二蓋の笠と一本の傘とを  
 裡向て嵌入して三笠を利せり  
 意匠なり、茶入、老悦と云化  
 美の川茶の時代の作なり。



百二十三 小川手茶入

口徑一寸三分 底一寸四分五厘  
高二寸六分 器上形手細地金銀

百二十四 黄瀬戸大海茶入

口徑二寸六分 底二寸七分五厘  
高二寸七分 老松茶

百二十五 備前茶入 宗旦在判

口徑一寸五分 高二寸八分  
茶玄三訣

百二十六 薩摩茶入

口徑八分五厘 脚一寸七分五厘  
常之留利漢東 箱 清水動岡

銘水堊

逢雪小色似掛物茶

水堊又器の寫垂しをいきてなすくわの形

百二十七 仁清口瓢箪茶入

口徑一寸 脚一寸五分  
高二寸五分 器金兼茶和

百二十八 漆付筒茶入

口徑一寸三分 高三寸

竹林高士彈琵琶  
堂 杉木普母



百二十九 白定茶盃

徑四寸 香台一寸五分 高寸七分  
内面一帯、刺花あり外面は稍白き茶花目あり一面、  
小片あり白色中、牙光を帯びて湿润の感あり

百三十 白定茶盃

徑四寸 香台一寸五分  
高寸七分

百三十一 白磁茶盃

徑四寸五分 香台一寸五分  
高寸七分

白玉の如く微瑕あり見込は微く羽半色を呈す内面一帯  
より淡く栴檀猫掻の痕ありてそこより染溜りて障き羽半  
色を認む平板と破る工更わたりたりすおやろし

百三十二 建盃天目

徑四寸二分 香台一寸三分  
高寸七分

百三十三 高麗玉子手茶盃

口徑四寸五分 香台一寸五分  
高寸七分

白玉の微瑕ありものの如く見込は芙蓉手の墨色うらけく  
新月明星散點し香臺内寸五分 玉冢二寸の墨散あり

百三十四 高麗三器

徑四寸五分 香台一寸五分  
高寸七分

百三十五 三島塩筥

口徑三寸二分 高寸四分  
香台一寸四分

三島茶盃中醜く七難あり  
もの之、着くものなるべし  
産真宗謹居士愛玩持あり  
りしものにはありたり

百三十六 桃形三島茶盃

口徑四寸五分 香台一寸五分  
高寸七分

百三十七 鬼熊川茶盃

口徑四寸五分 香台一寸五分  
高寸七分





百三十八 繪熊川茶盃

長径四寸四分 短径三寸九分 高三寸一分

琉球尚豊王 元禄七年一寛永七年の 将島津家の手を経て朝鮮  
在任 の陶工一伝 琉球に於て王の爲に陶器を焼造す所は熊川  
 伝神ありこゝを讀谷山朝慶氏の家、傳りしもの  
 鍾人三芳太郎氏之を將來ししものなり

百三十九 半使茶盃

径四寸五分 高台全五分 高三寸  
 半使中

青変にして半使中の尤品なり

百四十 安南茶盃

径四寸五分 高三寸五分  
 高台全五分 高三寸

百四十一 志野底紅茶盃

径五寸五分

見込、土坡を描き之、相生の松 篲と七羽の鶴 舞の遊ん  
 遠景、雁行の幾列々を見ると全面に底紅映り榮えて暖色を  
 思ひくくくくめくくくく、図様あり



百四十二 文山手造赤染茶盃  
口徑三寸五分 高一寸五分  
 八分一厘 樂の字書付あり 本名の落款あり 詩仙堂獨造の  
 竹きりしきり

百四十三 西山公手造茶盃  
口徑四寸五分 高一寸五分  
 銘千歲 箱書付 御子焼茶盃  
 副簡 川上三什

百四十四 陳元贊手造茶盃  
口徑四寸五分 高一寸五分  
 文様 藍繪玉取施  
香台徑三寸五分 高七寸五分  
茶台付 本多何豫守宗範

見込りし書の一文字 秀臺底に「文山」の書銘あり 副簡あり  
 御深井焼茶盃 玉龍之畫  
 文山先哲之作 應柳記主人之需  
 俾且之冬 陶二齋定



百四十五 五良七漆付茶盃

口徑三寸九分 身台徑一寸九分 高三寸三分

支標の雲鳳なり和那の漆付の支那傳と朝鮮傳とあり  
遂に合流して何万里の漆付となり所著五良七の支那傳の初祖なり

百四十六 古萩茶盃

銘卯乃老 柳沢堯山箱

口徑四寸五分 高三寸四分

卯の老の蓋あり古山城のかけねと銘あり

百四十七 木朱人形手茶盃

口徑四寸五分 高三寸四分

青磁沈牡丹金府銘あり木朱金澤より作るにたり

百四十八 新制衣天目茶盃 三種

諏訪蘇山 曜変天目 銘旭

板谷波山 曜変天目 銘天之川

清水六兵衛 油滴天目

百四十九 三島酒次

口一寸四分 胸三寸四分 高三寸

百五十 宋胡禄酒次

口一寸三分 胸三寸五分 高三寸五分

百五十一 尾戸酒次

正白の柄銘あり雅わたり

百五十二 酒坏十三種

定窯刺老

青華

金網手

青井戸

口一寸五分

河蘭陀

御本紅壺手

古唐津

唐津皮鯨

伊賀

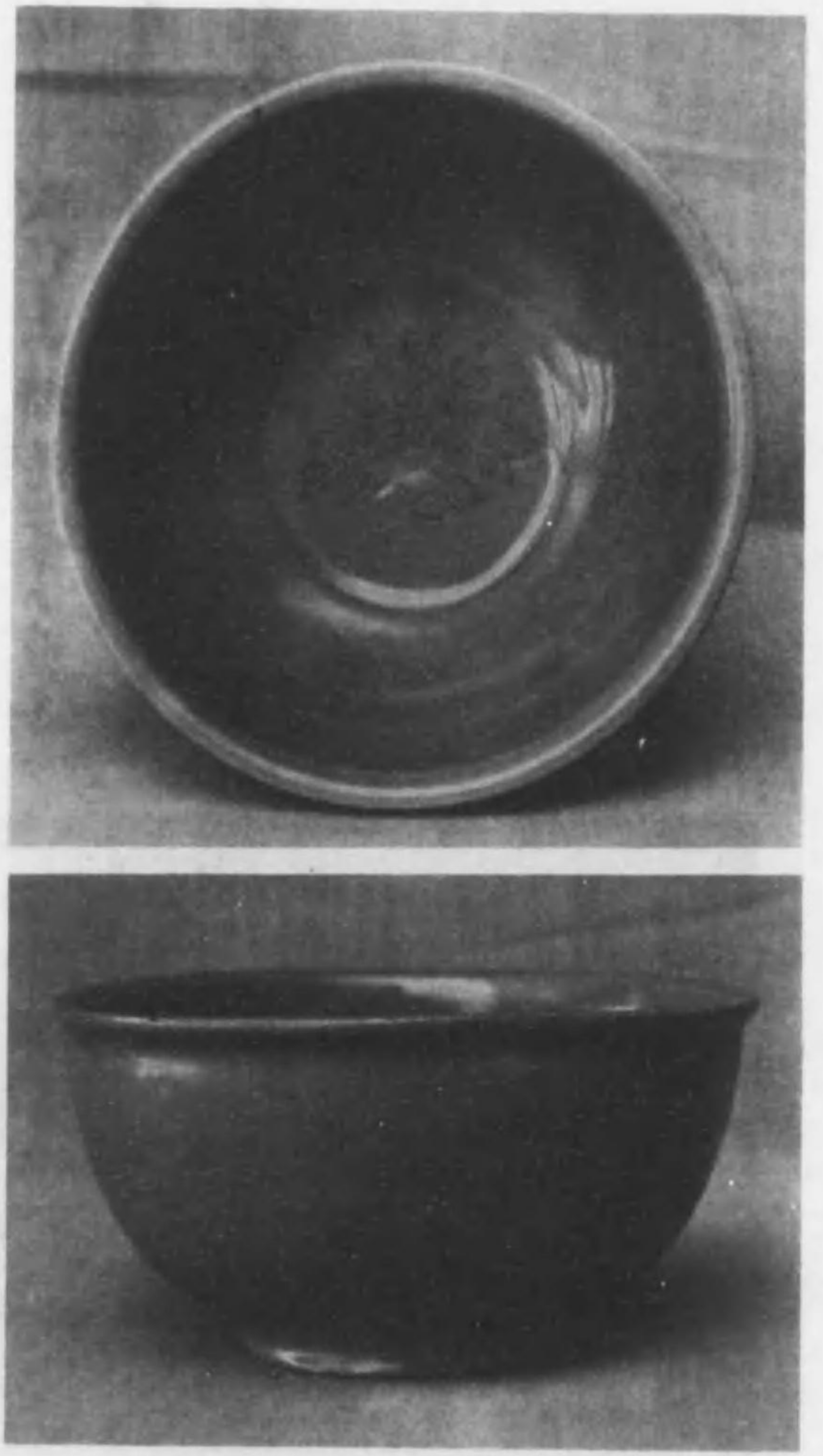
大樋

永樂

百五十三 高麗青磁鉢

徑五寸五分 高三寸六分 青台至三寸七分

此器は焼成の隆底、まてて四本の針の痕の外御釜は澤身  
上勻齊、融冷して一點の火向を見ず實に天衣無縫なる  
その玉肌その實光その手持の適度を之を把玩摩挲す  
れば人として坐すは快感を嘗てむ尚仔細に檢すれば口邊の  
微々瑞反とらるるそこ留紋の沈文様あり見込るは牡丹折  
枝の沈文様あり其内辺は多折枝の沈文様を四方、配し外  
辺は瑞苔の空合沈文様を四方に配し凡青磁の文様と  
して其沈文様は最難の技巧なる、斯くして織細にして  
而も鮮明に焼成し得るもの、高麗青磁の初期の製  
作、作るよゝとしてあはくは渡麗越工の手、成りしよ  
か。



百五十四 暹羅ペンチヤルン鉢

徑四寸九分 高三寸五分 青台至三寸

ペンチヤルンとは五彩の意なり支那の粉彩什錦手  
を模ししものなり

百五十五 波斯藍手鉢

徑七寸五分 高三寸五分  
考台徑三寸五分 五重

回青の本色藍揮し得て遺憾  
なく 成化嘉靖青華の藍本  
を合珠の技巧も久影青の先  
駆を



百五十六 九谷深鉢

徑七寸五分 考台二寸七分 高三寸五分

箱書付 白水庵觀阿

外ハ菊詰文様内ハ見込雲龍側面ハ龍の水ハ水車千鳥  
の文様阿蘭陀丸を



百五十七 比良深鉢

徑七寸三分 考台三寸四分 右四寸  
考台内、比良の二字押紙あり  
大牡丹を青、蔓を緑、大手に描きて、豪快なる花飾なり

百五十八 乾山 竹之繪 四方皿 七寸五分方





蓋、富士哉  
 瓶の傍あり  
 赤膚山人造  
 花押の書銘  
 あり



百五十九 乾山百合之繪四方四  
 堅七寸三分 横七寸  
 此器は伏焼にて製し、うろを以て口禿とあり、その内、漆器、漆を掛けて見込の繪の色と好き諧調を写し、その裏に全面、青きりとあり、年敷の紅斑、點ニとて、理久化趣を兼せり

百六十 木白赤膚大平鉢  
 徑七寸四分 高三寸四分  
 蓋五寸九分 四方四寸四分

百六十一 仁和寺摩尼珠文錦袈裟裂

堅二八寸  
横四九寸

仁和寺に傳存し、寛平法皇御袈裟のソツの比、割裂せら  
れしもの一片を蓮瓣蓮房の上、三顆の摩尼宝珠を光輝ま  
騰る状を、左右并に四隅に錫摩子文あり、此一片は錦の一窠間に  
ちりあそび、宝珠光炎蓮瓣皆巧妙なる經綯ガカニと機織の  
最巧なるものにして遺存品也、平安朝時代の錦なり、昔重文し

百六十二 神護寺蓮窠文錦佛幡裂

堅二八寸  
横七寸五分

後白河法皇の神護寺、御宇進の佛幡の裂と傳ふるものなり  
佛幡の中身三匡より成り、上部は三角巾を縫合せ之、菱状の金具  
と鈎鏤を白し下部は四梳を垂るなり、此裂は佛幡の中身にして  
三匡匡毎に蓮窠文標を出す日支様にして、毎匡配色を  
異し、いろよのりなり





百六十三 十字架図麻網刺繍

獅子弄球図麻網刺繍

各一尺方

十字架図、牌樓形の三門の中間、刺竿を建て右間、  
 聖樹を向、大鳥を配し、右は西教的楕圓と是が獅子  
 圖、支那元明時代楕圓の圖樣々々其製作は麻網、  
 共糸を以て文様と縫取りし、そのなり其用途、恐らくは  
 色多地の布、襯貼して文様と映出せしめ裝飾とし、  
 ともや、此装は、何れの時代、何れの地、産出し、  
 ともや、評するに、高少寺、お藏し、ともや、見そ  
 裏打紙、高山寺印を押し、そのソフの世々、支那と伝  
 来し、ともや、



百六十四 玉冠

頂部 長三寸五分  
中二寸七分

底部 長二寸四分  
中一寸七分

両側面、少孔あり、頭上に薄めたる推髪の上、之を被せ、少孔を通  
して筭を差込し、定住せしむるものなり。

百六十五 金銀錯嵌石帯鉤

全長六寸七分 重二寸五分

帯鉤中、七精美なるものなり、鍔先付、碧を凝らし、燈火を觀し、

百六十六 南蛮鍔

長三寸五分 短三寸

西洋に於て中世紀の比、フェンシングに用ひ、細身の刀の鍔なり、表  
面、鐵の透彫にして、草原、四狗嬉戲の状を為し、布目象嵌  
を以て銀飾を施せり、裏面ハ、重襷状透彫の鉄板を以て表  
裏合柙し、るものなり。

百六十七 波斯銀象嵌鐵笠

野外老草の間、行樂せる状景を描けり、るものなり、騎乗の男

女顔形して相語るものなり、如く從

僕負荷して、植上り、るものなり、此物本

来、何の用途を有せり、を知らざる、今見

えて、刺繍草花入り、るものなり。

百六十八 七寶蛇籠釘隠

全長三寸五分  
横一寸五分

二筋目家百工に照中、双存せり、

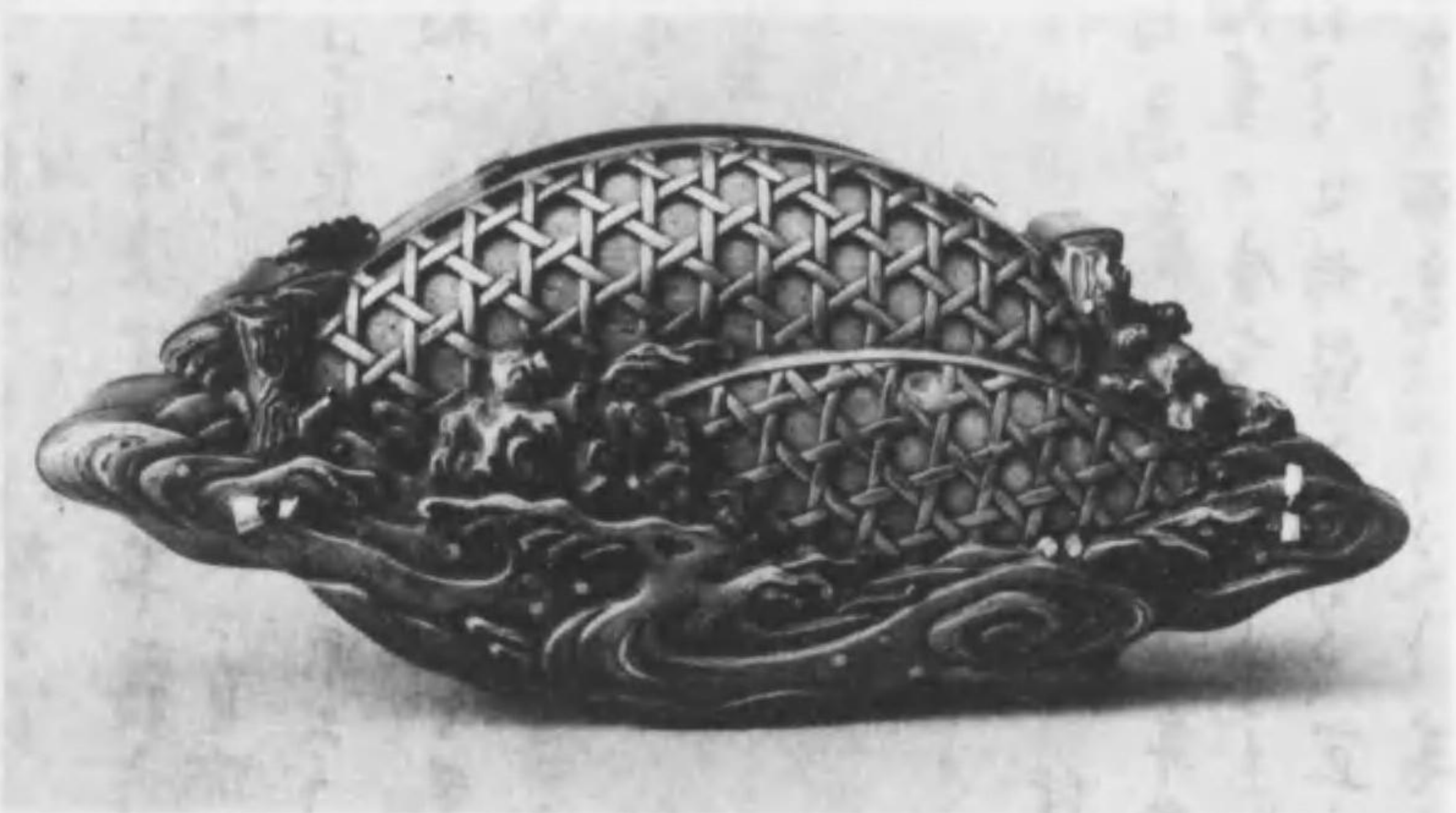
ハ、松御殿釘隠と証せり、るものなり、

同種類のものあり、何れの御殿

に用せられたるもの、明り、るものなり、

是製作ハ、寛永時代と云ふ、

ものなり、



百六十九 色繪彫刻長圓櫃

長櫃一尺五寸五分 高七寸五分

櫃ハ二階キ捲木を以て作り表裏共に珠塗甲冑の莖二枚を並へて之を並復ふ一枚は藤を以て櫃、鏝を合り七一枚は真鍮の蝶番ともう一間自在をうらし己莖表ハ繪標の浮彫あり中央ハ手披あり老松輪圍の上を蔽ふこゝに如左と手とせり老松臥虎の側、踏金し深衣の儒士をすあり之と語るこゝに如し左の赤丘陵の上を壘塔傳へくる今や塵尾を括てる老松前、進て竹葉輒を捧けて之、俯ふ壘裏より出て来りて嘉嘉翁と遠く々々如と見ゆ上ハ雲煙を排して紅日暉ニとりて升るあり此形象の浮彫には彩漆を施し空地は粗ハスラハ彫りて踏面ハ自然の凹凸と海面の激波を是せり此圓標は高麗鏡、往ニ見所のものに似たり故ハ此鏡は高麗物にして多クの年所と經て古色蒼然たり馬々々ハ縹素の座古ハ置きたるよりして以て衲衣をぬきへく短杖を依むこゝ又持鉢と仰むる、宜し長円をうけ故ハ莖と掩へは九ともたり腸息とくくくし莖表の

色繪浮彫はハ謂 鐘金彫  
の先驅と見ふべきと云ふ  
う因らば、高麗鏡の一例と  
出しては無、先づ



百七十 鐘倉彫高杯 径九寸九分 高さ

タカツキは原來高き臺付の酒杯と云ふべし高きサカ  
ツキの約して高杯と云ふは後、臺付の折敷も高ツキと  
呼ぶやうなり、尊う菓子を感じ器のと云ふは、偶  
けり、本來の形、一酒杯に用ひたるもの多し、臺  
脚、三面の圓筒形を繋ぎ、松竹梅の透彫を三面、施し  
たるものあり、其瑞雲臥置の妙、謂ふべし、朱漆乳花  
して、紅玉を彫琢し、如く向、砂子蔭を要處  
に施して、明暗を顯すや、と、細心の工夫あり、鐘倉彫、好  
標本なりし



百七十一 存清天目臺

六瓣若形承盤付天目臺なり皆朱地、存清文様を施す鳳凰、寶相華を巧、按捺せり大明宣徳年制衣の彫銘あり古製の典型と見えまものなり

百七十二 時代菊水時繪六角赤沈筥

甲 堅四寸五分 中三寸五分

百七十三 南蛮人時繪多宝

五二寸五分

慶長時代比の作なりし南蛮人跳躍の状を右と左手に帽子を持ち左手に團扇を敬りて弄技と演ずる図より南蛮屏風の例の如く南蛮人を描ける繪画には見多しと之も時跡は實、希觀なり



百七十四 膳椀

根來皆朱折敷

差渡一尺五分 角切

裏

鳳山

大カサ之内  
永正三丙寅

根來皆朱四椀

根來皆朱

櫛子

豆子

椿皿

珍法寺椀

早雲寺芹蔀繪椀

早雲寺傳來

吉野椀

喰初椀

百七十五 竹經筒

十六應真造化圖を彫刻す陳老蓮の筆意に似たり  
明製なり

百七十六 瓦磚

漢狩獵文磚

咸寧元年磚

鶴寺首菴文瓦

法隆寺忍冬文瓦

新羅普門寺飛天瓦



百七十七 文人書畫扇屏風

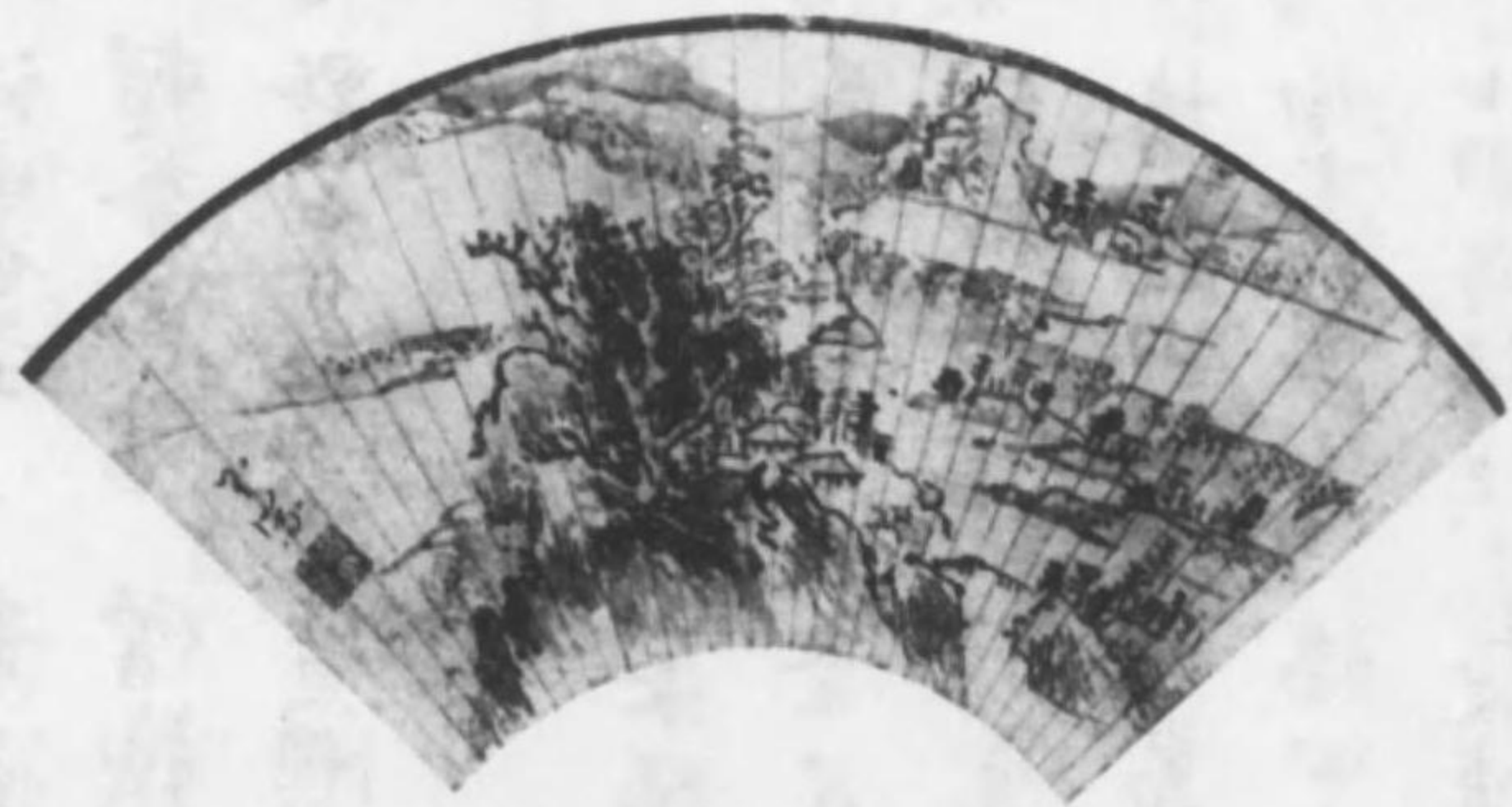
岳父和田曉雨翁の遺愛たり翁文人書画、風好あり多年、其蒐集中より書扇三十、畫扇三十と選ぶ書畫交互に次第し屏風、點裝し常に座右、展へて尚友を歩めり、尔來佳蹟出づるとこれ、加陰して宛壁を期し、うらうら終に華山山陽竹田の佳蹟、遺りてを憾とせし是れ應可有とて有らざる故、翁自ら三秋屏風方りと云故、せう佳蹟なりと語らし

屏風一雙の内一隻  
柳澤淇園書 徳山玉瀾山水 市河寛齋書 立原杏所葡萄 卷菱湖書  
春木南湖山水 服部南郭書 日根對山山水 安積良齋書 江馬細香蘭竹  
高游外書 山本梅逸竹 山本北山書 中林竹洞山水 梁川星嶽書

大雅堂 兼 柴野栗山書 濱田奎堂山水 龍首廬書 高之齋崖竹  
祇園南海書 剡雲泉山水 賴春風書 僧鐵翁梅菊 朝川善庵書  
侶雲室山水 貫若菴前書 野呂介石山水 廣瀬漆窓書 谷文一逸牛  
他の一隻

梁田屹崑書 木下逸雲書 高西因是書 山本琴谷梅 韓天壽書  
岡田半江山水 龜田鵬詠書 長所竹石蘭 秦星池書 岡本秋暉菊  
古賀精里書 浦上春翠山水 館柳湾書 僧雲羊蘭石 高島社帆書  
彭城百川人物 賴杏坪書 椿椿山老鳥 中島梓隱書 大空陸天氏竹  
佐藤一齋書 谷文晁鐵象 柏木如亨書 福田半香山水 菊池五山書  
三浦栴門山水 菅茶山書 山田海仙竹 筱崎小竹書 張嵐溪山水  
王叔心

扇面书法作品，内容为多行竖排文字，包括“梅芳”、“许慎”等字样。



扇面书法作品，内容为多行竖排文字，包括“梅芳”、“许慎”等字样。



昭和十年十月二十八日印刷  
昭和十年十一月一日發行

(十三松堂觀摩錄與附)

非賣品

編纂兼 發行者 正木直彦

印刷者 東京市本郷區金助町四十五番地 大塚稔

印刷所 東京市本郷區金助町四十五番地 大塚巧藝社

終